松江市文化財調査報告書　第169集

黒田住宅団地造成事業に伴う発掘調査報告書

黒田下屋敷遺跡

平成27(2015)年11月

松　江　市　教　育　委　員　会
公益財団法人 松江市スポーツ振興財団

例　　言

1．本書は、平成27年度に実施した、黒田住宅団地造成事業に伴う黒田下屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は、株式会社ひらぎのから松江市教育委員会が委託を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。

3．調査の遺跡名称、所在地、現地調査期間、開発面積、調査面積、調査組織は下記のとおりである。

⑴　遺跡の名称、所在地

名　　称　　黒田下屋敷遺跡（くろだしもやしきいせき）

所　在　地　　島根県松江市黒田町字下屋敷554番１外

⑵　現地調査期間　　範囲確認調査　平成27年４月17日～平成27年４月30日

本　調　査　平成27年５月１日～平成27年７月６日

⑶　開発面積及び調査面積

開 発 面 積　48,700㎡

調 査 面 積　　384㎡

⑷　調査組織

依 頼 者　株式会社　ひらぎの

主 体 者　松江市教育委員会　　教　育　長　清水　伸夫

事 務 局　松江市歴史まちづくり部　　部　　長　安田　憲司

〃　まちづくり文化財課　　課　　長　永島　真吾

〃　〃　専 門 幹（埋蔵文化財調査室長兼務）　飯塚　康行

〃　〃　埋蔵文化財調査室　調査係　係　　長　赤澤　秀則

〃　〃　〃　〃　主　　任　川上　昭一

〃　〃　〃　〃　嘱　　託　門脇　誠也

調査指導　島根県教育庁文化財課　　主　　幹　深田　　浩

実 施 者　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　　理　事　長　清水　伸夫

〃　埋蔵文化財課　　課　　長　曽田　　健

〃　〃　調査係　係　　長　川西　　学

〃　〃　〃　調　査　員　江川　幸子（担当者）

〃　〃　〃　調査補助員　北島　和子

〃　〃　〃　調査補助員　渡邊　真二

調査に携わった発掘作業員（50音順）

岩成敏章、岩成博美、勝部誠、加藤恵治、福田紘治、渡部耕二、和田章

4．本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下のものが行った。
坂本玲子、塩田陽子

5．現地調査及び本書の作成にあたっては次の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する（敬称略）。
黒田町自治会
島根県教育庁 島根県埋蔵文化財調査センター企画幹　柳浦俊一
文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳

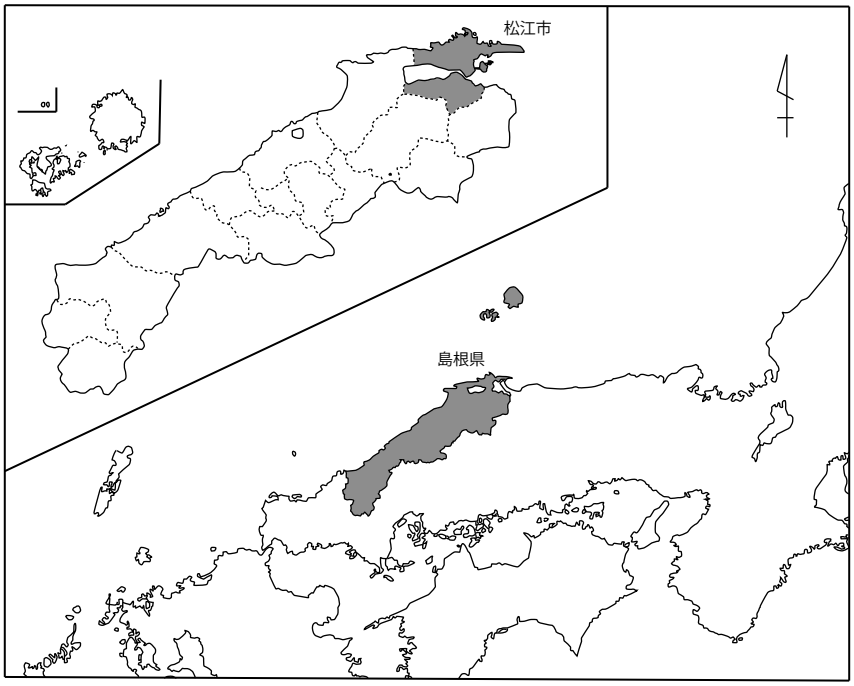
6．本書の執筆及び編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川がおこなった。

7．本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。
［縄文土器］
・鈴木康二「縄文土器の研究１」（財団法人滋賀県文化財保護協会『紀要』第15号）2002
［土師器］
・島根県教育委員会『史跡出雲国府跡－９総括編－』2013
［須恵器］
・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

8．本書における「土層の色・質」は、調査時の記載をそのまま使用している。

9．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海抜標高を示す。

10．出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。



島根県・松江市位置図

目　次

例言

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と歴史的環境 …… 2
　第１節　位置 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　黒田下屋敷遺跡の範囲確認調査 …… 5

第４章　黒田下屋敷遺跡の本調査 …… 7
　第１節　概要 …… 7
　第２節　層序 …… 9
　第３節　遺物 ……13
　　第１項　第Ⅴ層出土遺物 ……13
　　第２項　第Ⅳ層出土遺物 ……13
　　第３項　第Ⅱ層出土遺物 ……17
　　第４項　第Ⅰ層出土遺物 ……31

第５章　総括 ……32
　第１節　第Ⅴ、Ⅳ層（縄文時代） ……32
　第２節　第Ⅱ層（中世） ……34
　第３節　第Ⅰ層（近世～） ……34
　第４節　結語 ……34

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　開発範囲と黒田下屋敷遺跡 …… 1
第２図　黒田下屋敷遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第３図　黒田下屋敷遺跡とグリッド設定図 …… 6
第４図　黒田下屋敷遺跡調査成果図 …… 8
第５図　調査区東壁セクション図 ……10・11
第６図　調査区南壁セクション図 ……12
第７図　第Ⅴ・Ⅳ層出土遺物実測図 ……14
第８図　第Ⅳ層出土遺物実測図 ……15
第９図　第Ⅱ層出土遺物実測図（１）……16
第10図　第Ⅱ層出土遺物実測図（２）……17
第11図　第Ⅱ層出土遺物実測図（３）……18
第12図　第Ⅱ層出土遺物実測図（４）……20
第13図　第Ⅱ層出土遺物実測図（５）……21
第14図　第Ⅱ層出土遺物実測図（６）……22
第15図　第Ⅱ層出土遺物実測図（７）……22
第16図　第Ⅱ層出土遺物実測図（８）……24
第17図　第Ⅱ層出土遺物実測図（９）……25
第18図　第Ⅱ層出土遺物実測図（10）……26
第19図　第Ⅱ層出土遺物実測図（11）……27
第20図　第Ⅱ層出土遺物実測図（12）……28
第21図　第Ⅱ層出土遺物実測図（13）……29
第22図　第Ⅱ層出土遺物実測図（14）……30
第23図　第Ⅰ層出土遺物実測図 ……31
第24図　松江市の縄文遺跡分布図 ……33

挿　表　目　次

第１表　調査範囲確定のためのトレンチ調査結果 …… 5
第２表　基本層序と第５・６図土層の対応表 …… 9

図　版　目　次

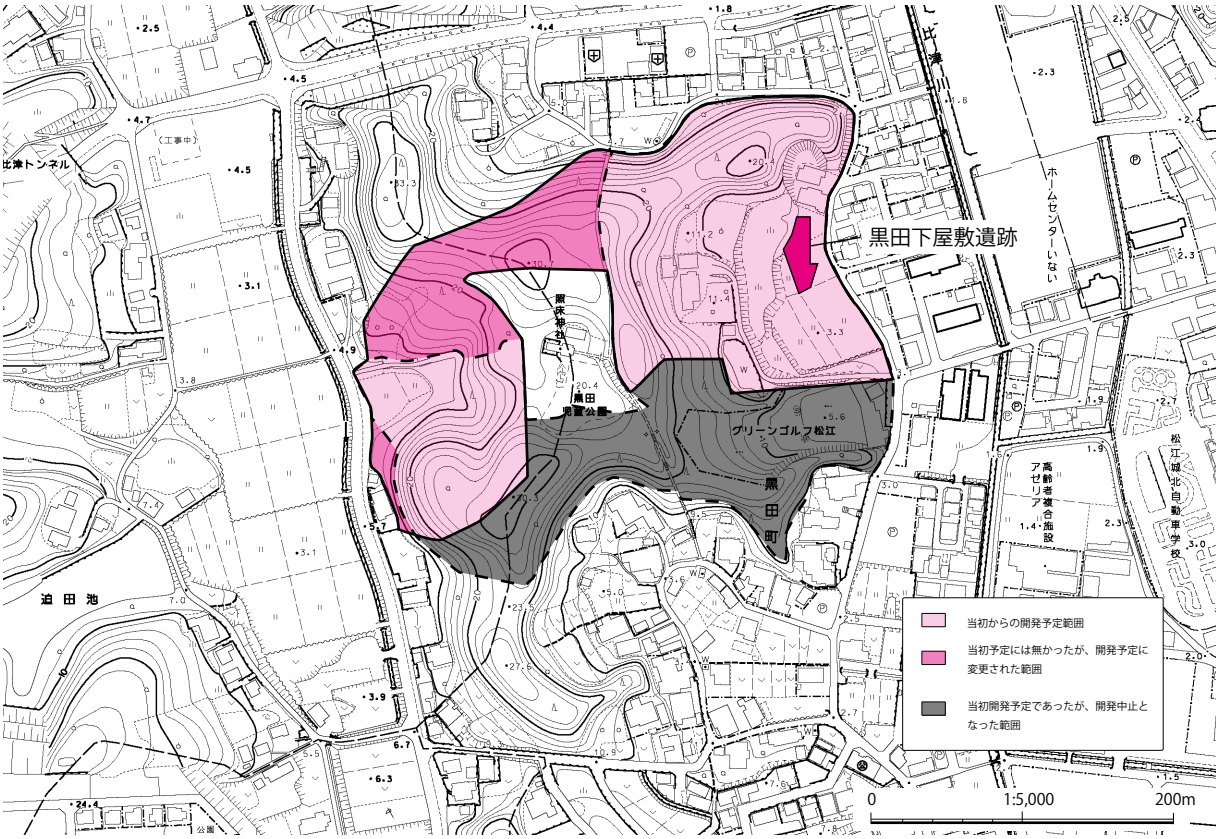
図版１（上）調査前風景（北から）
（下）完掘状況（南から）
図版２（上）南端の地山検出状況（北から）
（下）調査区南壁セクションA-A'（北から）
図版３（上）調査区東壁セクションB-B'（南西から）
（下）調査区東壁セクションB'-A（南西から）
図版４（上）第Ⅱ層①黒色粘質土の擾乱状況
（下）第Ⅱ層の遺物出土状況
図版５（上）第Ⅳ層の縄文土器出土状況
（下）第Ⅴ層の縄文土器出土状況
図版６　出土遺物
図版７　出土遺物
図版８　出土遺物
図版９　出土遺物
図版10　出土遺物

第 1 章　調査に至る経緯

平成 25 年 10 月 1 日、黒田住宅団地造成事業に関しての松江市土地利用調整会議が開催され、事業者から計画説明等が行われた。当地は埋蔵文化財の未調査地であり、松江市文化財課（平成 26 年 4 月からまちづくり文化財課）としては、まずは遺跡の有無を確認するための分布調査が必要な旨を伝えた。これを受け、平成 26 年 2 月 13 日に埋蔵文化財の有無確認調査の依頼書が提出され、対象地 57,000㎡における分布調査を実施した。

分布調査では、古墳や横穴墓など明確な遺構は確認できなかったが、更に詳細な調査が必要な地点 8 カ所を確認した。詳細確認のための試掘調査は 2 月 21 日～ 4 月 17 日の間(実働は 4 日間)で実施し、開発予定地東側の水田下で遺物包含層を確認した。4 月 28 日付けで土地所有者から文化財保護法第 96 条に基づく届出が提出され、当地の小字名をとり黒田下屋敷遺跡として取り扱うこととなった。

この後、事業計画に変更があり、開発予定地の規模が 48,700㎡に縮小された。当初予定地の南側が開発計画から外れたものであるが、新たに北西の山林が開発範囲に加わった。このため、新たに加わった北西側の山林の分布調査を平成 27 年 2 月 18 日に実施し、3 月 11 日、12 日の 2 日間で 4 つのトレンチ調査を実施した。ここでは遺跡と認められるものは確認できず、黒田下屋敷遺跡に関しての文化財保護法第 93 条の届出が提出された。当遺跡については、3m 以上の盛土により造成が計画されていたため、工事に先立って本発掘調査を実施することとなった。



第 1 図　開発範囲と黒田下屋敷遺跡

第２章　位置と歴史的環境

第１節　位置

黒田下屋敷遺跡（1）は、島根県松江市黒田町字下屋敷 554 番 1 外に所在する。

『出雲国風土記』（以下『風土記』）によれば、出雲国島根郡法吉郷である。

島根半島には平均標高 350 mの山塊が東西に連なる通称北山山系が走り、松江市域では北山山系から南に向けて多くの支脈丘陵が伸びている。それらの支脈のうち、『風土記』に記載された「佐太水海」に比定されている浜佐田町に東接する支脈、つまり比津丘陵から南へ伸びる支脈丘陵の東半分とその東麓の低地一帯に黒田町は位置している。

黒田下屋敷遺跡は黒田町の中でも北寄りの低地部分にあたる。

当遺跡の東には比津川の流れる南北に長い谷があり、その一部は『風土記』に記載された「法吉陂」に比定される。このあたりの谷では丘陵からの伏流水も豊富であるため、水田耕作のほか、湿地を好む黒田芹の栽培がおこなわれてきた。現在では宅地化が著しいが、周囲に比べて土地が低いため、大雨の後にはしばしば滞水する事例が報告されている。

第２節　歴史的環境

黒田下屋敷遺跡周辺における遺跡の数は多くないが、北方丘陵を中心に大規模な宅地開発、道路の新設等がおこなわれたため、近年では発掘調査による遺跡の発見が増えてきた。以下では、周辺の遺跡について時代を追って概観する。

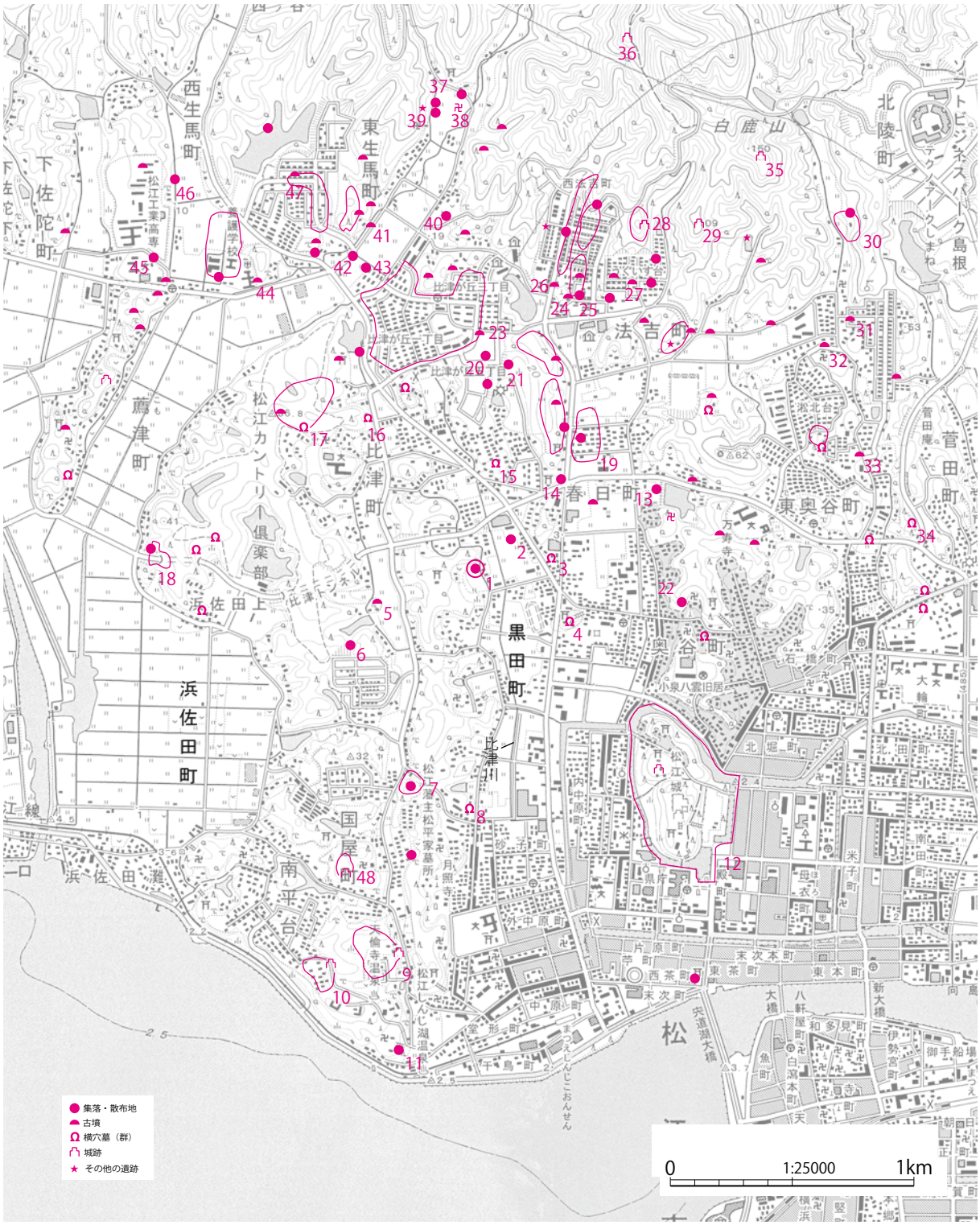
旧石器時代　大門遺跡（40）で安山岩製の尖頭器 1 点、白鹿谷遺跡（30）で玉髄製の掻器 1 点が採集され、後期旧石器時代の石器と考えられている。

縄文時代　春日遺跡（2）、天倫寺前遺跡（11）で土器や石器が出土し、法吉遺跡（19）では遺物のほかにドングリの集積が確認されている。遺物散布地としては、白鹿谷遺跡や紺屋垣遺跡（43）、藤ケ森遺跡（42）、下がり松遺跡（25）、中代遺跡（14）が知られている。

弥生時代　田中谷遺跡（26）と下がり松遺跡で発掘調査がおこなわれて、多くの加工段や竪穴建物跡、掘立柱建物跡が検出され、後期に大規模な集落が存在していたことが解明されている。下がり松遺跡にほど近い二反田遺跡（13）では後期、佐太水海に臨む石田遺跡（18）の丘陵上では中期末～後期の竪穴建物跡が検出されている。遺物散布地としては、春日遺跡や法吉遺跡、名尾遺跡（45）、元井手遺跡（46）、比津小丸山古墳（5）が知られている。

古墳時代　前期の古墳数は少なく、一辺 10 m強の方墳、かいつき山古墳群（44）、石田古墳（18）が造られている。石田古墳の主体部には少量の朱が使用され、仿製鏡と大量の玉類が副葬されていた。

中期に入ると折廻古墳群（33）、敷居谷古墳群（47）、21 基からなる月廻古墳群（23）など多くの



1	黒田下屋敷遺跡	13	二反田遺跡	25	下がり松遺跡	37	東生馬遺跡
2	春日遺跡	14	中代遺跡	26	田中谷古墳	38	平ノ前廃寺
3	法吉小学校裏山横山墓群	15	比津ヶ崎横穴墓群	27	伝宇牟加比売命御陵古墳	39	法恩寺瓦窯跡
4	摩利支天山横山墓群	16	水酌崎横穴墓群	28	高つぼ山城跡	40	大門遺跡
5	比津小丸山古墳	17	ゴルフ場内横穴墓群	29	小白鹿城跡	41	桜本古墳
6	久傳遺跡	18	石田遺跡	30	白鹿谷遺跡	42	藤ヶ森遺跡
7	舎人遺跡	19	法吉遺跡	31	二反田古墓	43	紺屋垣遺跡
8	とねり坂横穴墓群	20	久米遺跡	32	岡田薬師古墳	44	かいつき山古墳群
9	荒隈城跡小十太郎地区	21	久米Ａ遺跡	33	折廻古墳群	45	名尾遺跡
10	荒隈城跡	22	久米Ｂ遺跡	34	菅田横穴墓群	46	元井手遺跡
11	天倫寺前遺跡	23	月廻古墳群	35	白鹿山城跡	47	敷居谷古墳群
12	史跡松江城	24	塚山古墳	36	大高丸跡	48	荒隈城跡（平成15年度調査）

第２図　黒田下屋敷遺跡と周辺の遺跡

古墳が築造されているが、大半は一辺 10 ～ 20 m程度の小規模古墳である。しかし、単独で造営された塚山古墳（24）は一辺 33 mの方墳で、造り出しや周堀、外堤を持ち、墳丘上には形象埴輪や円筒埴輪が立てられていた。主体部には仿製鏡のほか短甲、鉄剣、鉄刀、多量の玉類が副葬されており、軍事色の強い法吉地域の首長墓と考えられ、畿内政権とのつながりもうかがうことができる。

後期には、塚山古墳の要素を引き継ぐ伝宇牟加比売命御陵古墳（27）のほか、全長 26 mの前方後方墳、比津小丸山古墳、横穴式石室を主体部に持つ岡田薬師古墳（32）、桜本古墳 (41) などが築造されている。しかし、この地域では後期後半以降になると横穴墓が主流を占めるようになる。菅田横穴墓群（34）は最低でも 22 穴で構成された横穴墓群で、1 つの前庭部を複数の横穴墓で共有するものがみられた。当遺跡の近くではこれほど大規模な横穴墓群は見られないが、比津ヶ崎横穴墓群(15)、法吉小学校裏山横穴墓群 (3)、とねり坂横穴墓群 (8)、水酌崎横穴墓群 (16)、摩利支天山横穴墓群 (4)、ゴルフ場内横穴墓群 (17) など多数の分布がみられる。

生活遺跡はあまり調査されていないが、石田遺跡から中期の竪穴建物跡 2 棟、久傳遺跡（6）から加工段 4 か所に後期の掘立柱建物跡 6 棟が良好な状況で検出されている。遺物散布地としては東生馬遺跡（37）、大門遺跡が知られている。生産遺跡は調査されていないが、かいつき山古墳から碧玉や赤瑪瑙の石屑、玉砥石が出土しているので、その周辺に玉作遺跡があったと推察される。

奈良･平安時代　田中谷遺跡で 18 棟の掘立柱建物跡が検出されており、そのうち 1 棟が大型建物で、集落の中心的建物であったと考えられている。腰帯具や墨書土器 1 点が出土しており、隣接する下がり松遺跡でも墨書土器 1 点が出土している。そのほか久米遺跡（20）、久米 A 遺跡（21）、久米 B 遺跡（22）でも集落跡が発掘調査されており、久米遺跡では大規模な加工段を有する掘立柱建物跡 13 棟、久米 A 遺跡では掘立柱建物跡 2 棟、久米 B 遺跡では掘立柱建物跡 11 棟などが検出されている。

平安時代には平ノ前廃寺（38）が創建され、法恩寺瓦窯跡（39）周辺に布目瓦が散布している。

中世　下がり松遺跡で鎌倉時代の古墓、二反田古墓（31）で室町時代の宝篋印塔 14 基からなる古墓群が確認されている。白鹿山城跡（35）は尼子氏の支城で、「尼子十旗」の中でも特に重要な位置をしめた山城であり、小白鹿城跡（29）、高つぼ山城跡（28）、大高丸跡（36）などの要塞で構成されている。荒隈城跡（10）は毛利元就が尼子氏攻略のために築いた陣城である。城域全体は広大と考えられており、荒隈城跡小十太郎地区(9)や舎人遺跡(7)では城跡に直結する遺構は検出されなかったが、平成 15 年度に松江市教育委員会が実施した地点（48）では虎口や曲輪が検出されている。

近世　松江城（12）を中心にして城下町が整備された。当遺跡の西側丘陵上には、字名「黒田下屋敷」のとおり松江藩代々家老、朝日丹波の下屋敷跡があり、当時のものと伝えられる土蔵、灯篭、石垣などが残されている。高台にある下屋敷跡からは、南東方向に松江城天守を望むほか、嵩山から大山まで広い範囲を眺望することができる。

【参考資料】 加藤義成校注 1965 『出雲国風土記』
島根県教育委員会 2003 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』
松江考古学談話会 2001 『松江考古第 9 号』
松江市史編纂委員会 2012 『松江市史 史料編 2 考古資料』
松江市法吉公民館 1995 『法吉の歴史あれこれ』
松江市法吉公民館 2010 『法吉わがとこ聞き歩き』ほか。

第３章　黒田下屋敷遺跡の範囲確認調査

黒田下屋敷遺跡は、平成 26 年度に実施した遺跡の有無確認調査（第３図Ｔ－Ｂ）で発見された遺跡である。便宜的にトレンチを設定した水田を遺跡の範囲としたが、詳細な範囲や性格は分かっていなかった。このため、まずは遺跡の範囲と性格を確認する調査から開始した。

調査は国土座標Ｘ＝－ 56900 とＹ＝ 79380 の交点を基点として、5 ｍグリッドを設定し（第３図）、グリッドごとにトレンチを掘り、遺構や遺物が検出される範囲をもって遺跡範囲とすることにした。グリッド名は、基点から西へ向かってアルファベット（Ａ、Ｂ、Ｃ、…）、南へ向かってアラビア数字（０、１、２、…）を与え、アルファベットの後にアラビア数字を組み合わせて呼称した。たとえば、第３図の☆印を付したグリッドはＡ 11 区である。

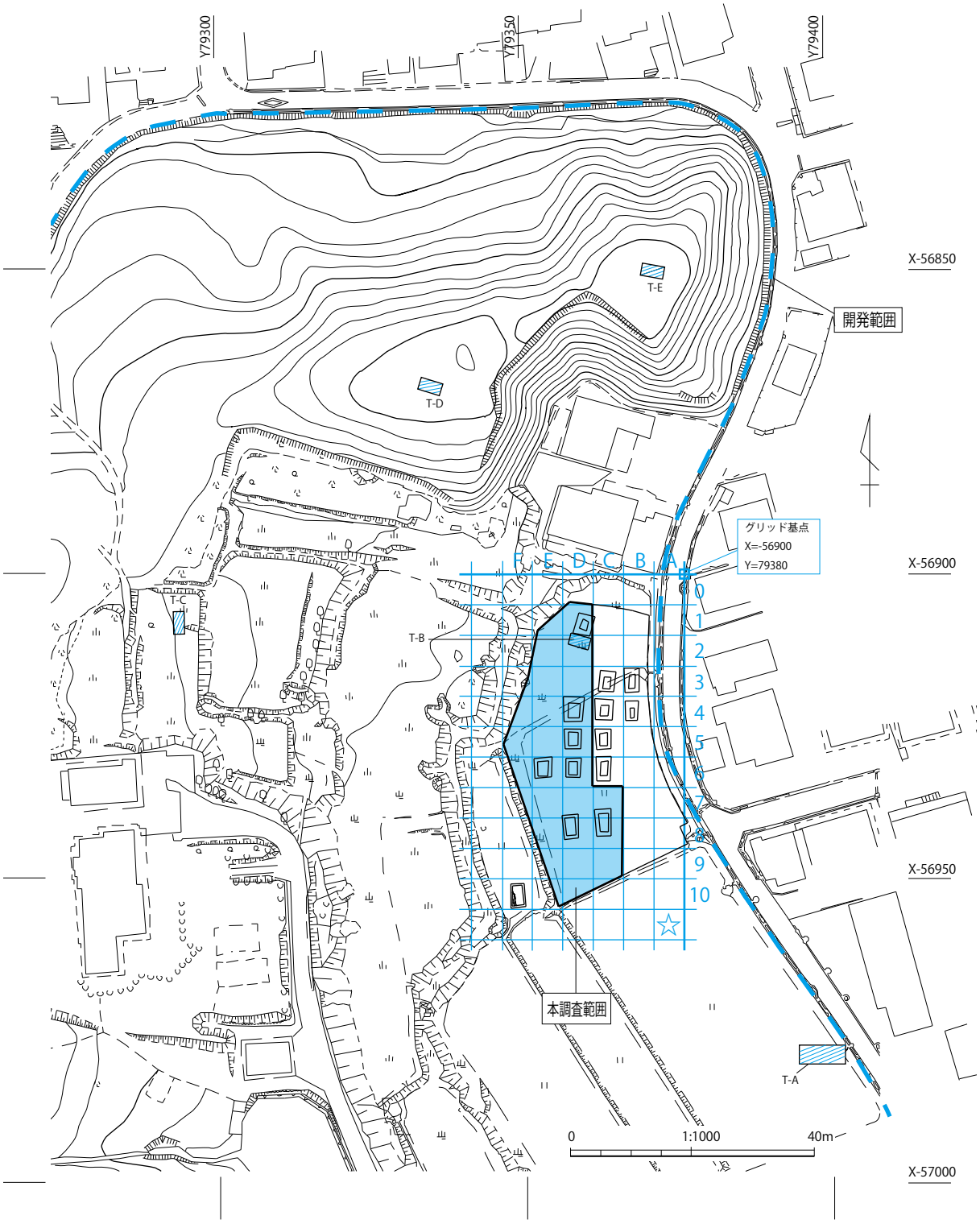
現地調査は、平成 27 年 4 月 17 日にグリッドの杭打ちを行った後、4 月 20 日から重機により第Ⅰ層[(1)]の除去を開始し、剥ぎ取りが終了したトレンチから順次人力による遺物包含層（第Ⅱ層[(2)]）の掘削を行った。

調査の結果、第Ⅱ層は中世までの遺物を含む包含層であることを新たに確認した。また、明確な遺構は検出できなかったが、包含層はほぼ水平堆積した粘質土を中心とする層であり、耕作の可能性も考えられるものであった。この包含層（第Ⅱ層）は、設定したトレンチのほぼ全域で確認できたが、出土遺物は西側の丘陵近くで密度が高く、この丘陵から離れると、極端に低くなる傾向が判明した。一段高い丘陵部のＦ 10 区トレンチでは地山が水平に削平されており、遺物包含層は検出できなかった。各トレンチの調査概要は第 1 表のとおりである。5 月 1 日に、この調査成果をもとに松江市埋蔵文化財調査室と協議を行い、第３図で示した 384㎡を本調査の対象地とした。

注（1）第 4 章第 2 節参照。
（2）（1）と同じ。

第 1 表　調査範囲確定のためのトレンチ調査結果

グリッド名	トレンチの概要	本調査
B3 区	第Ⅱ層からわずかな土器細片が出土したが、出土量は極めて希薄。	×
B4 区	遺物は出土していない。	×
C3 区	第Ⅱ層から石錘 1 点とわずかな土器細片が出土したが、土器量は極めて希薄。第Ⅰ層 (重機掘削時) から、中世の甕 (常滑産) と近世の国産磁器小片が出土。	×
C4 ～ 6 区	第Ⅱ層からわずかな土器細片が出土したが、出土量は極めて希薄。	×
C8 区	第Ⅱ層から比較的大きめの土器破片が出土したが、出土量は D8 区より少ない。	○
Ｄ 1 区	地山を検出した。第Ⅱ層から土器細片のほか黒曜石の剝片が出土。	○
D5・6 区	第Ⅱ層から土器細片が出土したが、出土量は少なかった。	○
D8 区	第Ⅱ層から比較的大きめの土器破片が多く出土。	○
E6 区	第Ⅱ層から土器細片が出土した。調査区の中では一番出土量が多い。	○
F10 区	削平された地山を確認した。遺物包含層は存在しない。	×



第３図　黒田下屋敷遺跡とグリッド設定図

第４章　黒田下屋敷遺跡の本調査

第１節　概要（第４図）

本調査は、重機により第Ⅰ層[(1)]を除去することから始めた。平成 27 年５月１日から剥ぎ取り作業に取り掛かり、剥ぎ取りが終了した北側から人力による第Ⅱ層[(2)]の調査に取り掛かった。調査を進めるとＤ６・Ｅ６区での排水溝掘削中に第Ⅱ層の下に位置する第Ⅲ層[(3)]から炭化物が多く出土する状況を確認した。このため、東西方向のサブトレンチ（Ｔ－1）を設定して確認をおこなったところ、縄文土器が出土する第Ⅳ層[(4)]の存在を確認した。これにより、最終的にはこの遺物包含層まで調査をおこなっている。

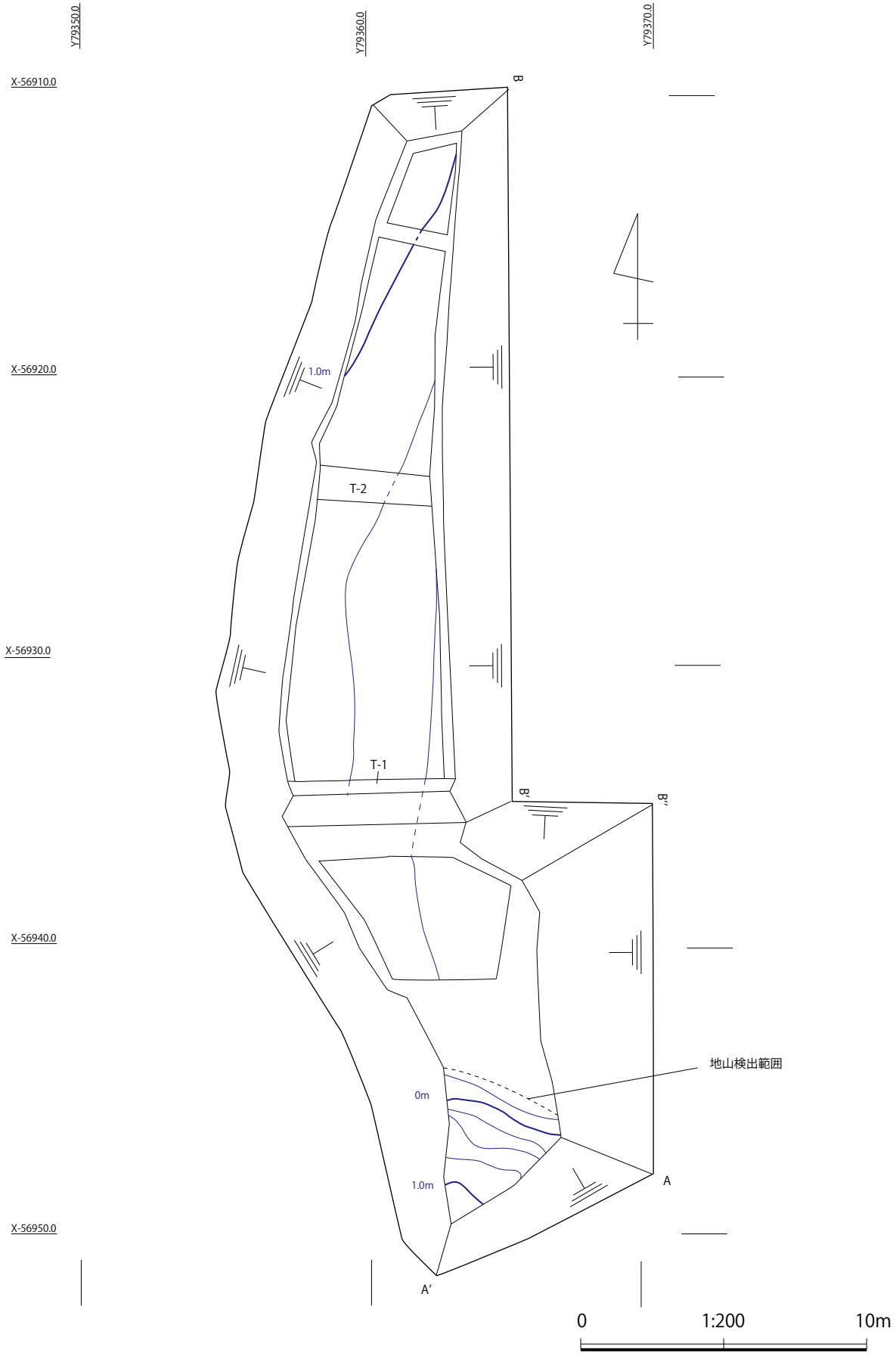
さらにＤ 10 区の調査では、北東方向に向けて傾斜する地山を確認しており、この直上に堆積する第Ⅴ層[(5)]から縄文土器１点が出土している。新たにサブトレンチ（Ｔ－2）を設定して、掘削を行ったがこれ以外に遺物は確認できず、非常に希薄な包含層であることから全面発掘とはしていない。

６月 18 日に島根県教育庁文化財課及び松江市埋蔵文化財調査室から最終の調査指導を受け、６月 24 日に掘削作業を終了した。６月 24 日に全体写真の撮影、６月 25 日～７月６日に土層断面図の作成と地形測量を行い現地での調査を完了した。

調査の結果としては、耕作が行なわれていた可能性のある中世の遺物を含む包含層（第Ⅱ層）、縄文時代の包含層（第Ⅳ、Ⅴ層）を確認した。遺構は検出できなかった。

注（1）～（5）第４章第２節参照。

Ｅ７区付近の第Ⅱ層掘り下げ風景



第 4 図　黒田下屋敷遺跡調査成果図

第２節　層序

調査地の現況地盤面の標高は 2.3m、最も深くまで掘削が及んだサブトレンチ下面で計測すると標高－ 1.0m を測り、3.3m ほど掘り下げている。土層図は東壁と南壁で作成しており、東壁で 52 層 (第 5 図)、南壁で 19 層 (第 6 図) に分層した。現地では細かい分層を行っているが、今回の報告にあたり土層の連続性や土質によって、各層を第 2 表のとおり、8 つの層（基本層序）に大別した。以下では基本層序について詳細を述べる。

第Ⅰ層は灰色系の粘質土の一群である。水平に堆積していることや礫を含まないことから、水田などの耕作土であったと解釈している。遺跡の範囲確認のための試掘調査時に 17 世紀頃の肥前系磁器が出土したことから、近世以降の耕作土と考えられる。基本的には本調査では重機により除去した層である。

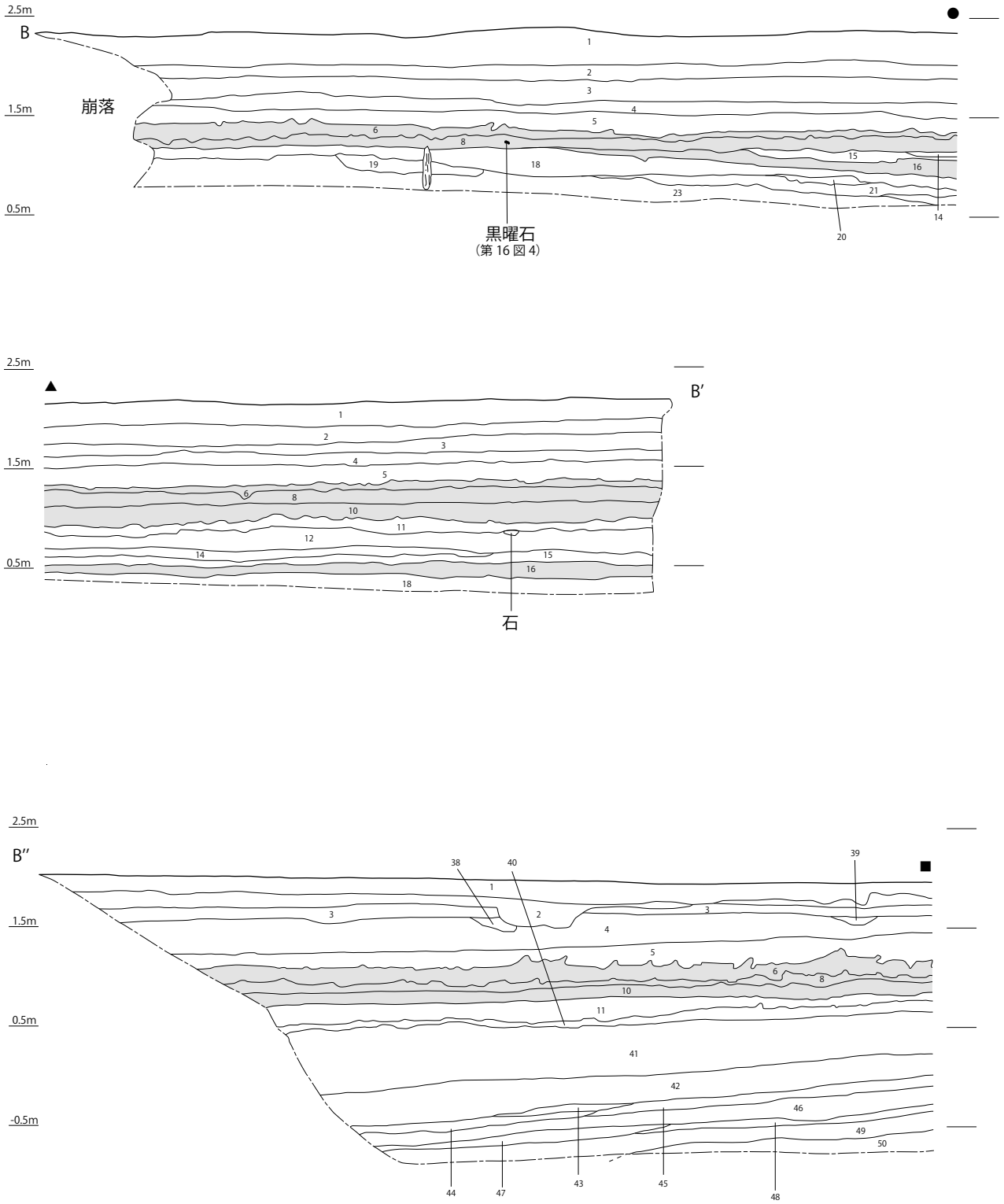
第Ⅱ層はほぼ水平に堆積した縄文時代から中世の遺物包含層である。上面に堆積する①黒色粘質土層 (第5図6層) は、その色調から容易に第Ⅰ層と区分することができる。実測図には実線で掲載したが、擾乱が著しくラインが引き難い部分も見られた (写真図版 4 上段参照)。この擾乱は、踏み込みや農工具によると思われるものであり、畦畔などの遺構が検出されないものの、耕作土の可能性が指摘できる。この下層には②炭混灰色砂質土層 (第 5 図 8 層)、③炭混灰色粘質土層 (第 5 図 10 層) という炭化物を多く含んだ堆積層があり、下層ほど破片が大きく量が多い状況であった。

第Ⅲ～Ⅶ層は有機質層や砂層からなる一群である。有機質は葉や小枝などが中心で、流木や倒木など大きなものは少なかった。どの層も有機質が未分解の状態で出土していることから、水際もしくは湿地で堆積した層と考えられる[(1)]。縄文時代前期初頭～中期初頭と考えられる土器が出土した第Ⅳ層を鍵層として、この層の上層を第Ⅲ層、下層を第Ⅵ層、新旧関係不明の層を第Ⅶ層として分類した。第Ⅲ層は無遺物層であるが、炭化物が混じっている。第Ⅵ層は炭化物を一切含まない無遺物層である。第Ⅶ層は東壁の南側で観察できる無遺物層である。ここからは鍵層となる第Ⅳ層を検出しておらず、第Ⅲ層に含めるべきか第Ⅵ層に含めるべきか判断できなかった。

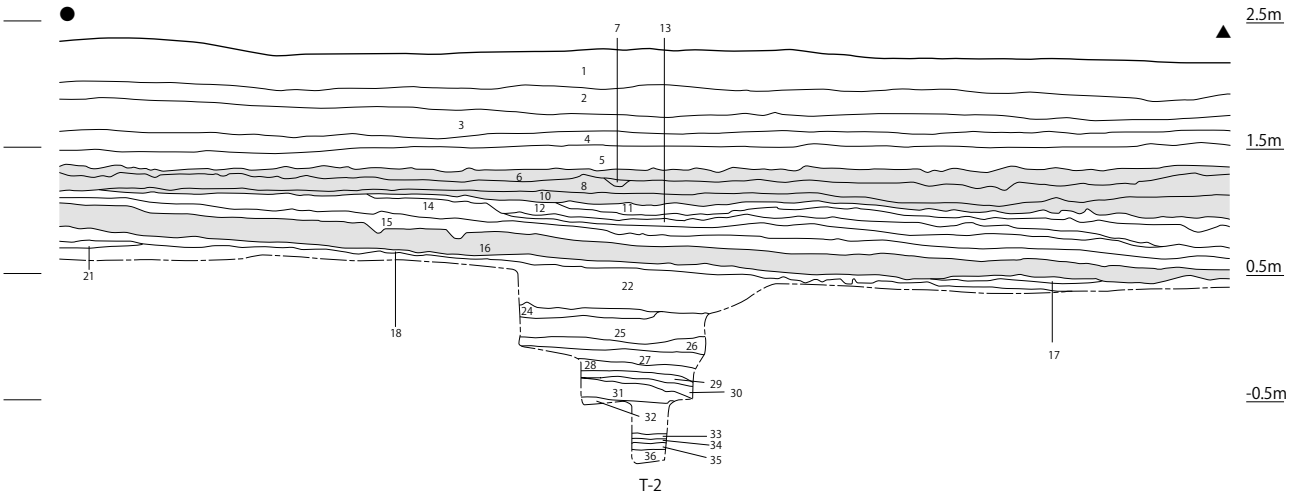
第Ⅴ層とした灰白色砂質土は、調査区の南端だけに見られるものである。当地の地山は泥質の砂岩で非常に脆く、きわめて侵食を受けやすい。第Ⅴ層はこうした地山がいったん浸食されて再度堆積した層と考えられ、細かい未分解の有機質を多く含んでいた。この層は斜面上方にあたる西側で薄く、

第２表　基本層序と第５・６図土層の対応表

	東壁セクション (第 5 図)	南壁セクション (第 6 図)
第Ⅰ層	1 ～ 5・37 ～ 39	1 ～ 4
第Ⅱ層	6 ～ 10	5 ～ 8
第Ⅲ層	11 ～ 15	9 ～ 11
第Ⅳ層	16	
第Ⅴ層	51	18
第Ⅵ層	17 ～ 36	
第Ⅶ層	40 ～ 50	12 ～ 17
第Ⅷ層	52	19



第５図－１　調査区東壁セクション図



1 砂を含む灰色粘質土
2 灰褐色砂質土
3 砂混灰色粘質土
4 灰色粘質土
5 濃灰色粘質土
6 黒色粘質土（中世までの遺物包含層）
7 濁灰色粘質土
8 炭混灰色砂質土（中世までの遺物包含層）
9 灰色粘質土
10 炭混灰色粘質土（中世までの遺物包含層）
11 有機質（褐色）

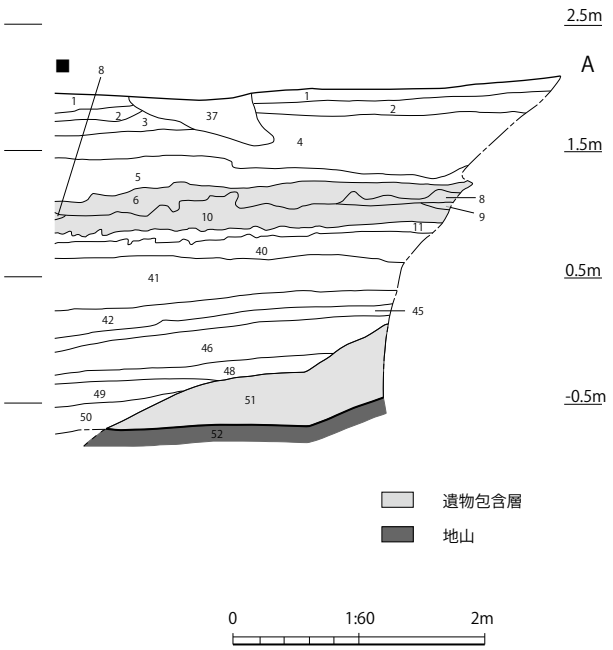
第Ⅰ層
第Ⅱ層

12 有機質を含む灰褐色砂質土
13 灰色粗砂
14 砂層が入る炭混淡褐色粘質土
15 有機質を多量に含んだ褐色砂質土
16 有機質を含む褐色砂質土
（縄文時代の遺物包含層）
17 灰色砂層
18 有機質を多量に含んだ褐色砂質土
19 有機質を多く含む灰色砂層
20 有機質を含む灰色砂質土
21 有機質を含む灰色粘質土

第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅵ層

22 有機質が多い砂混褐色粘質土
23 有機質を多く含む灰色砂質土
24 褐色粘質土
25 有機質が特に多い褐色粘質土
26 褐色粘質土
27 有機質が多い褐色砂質土
28 有機質が多い褐色粘質土
29 灰色砂質土
30 有機質を含む砂混褐色粘質土
31 有機質が多い褐色粘砂質土
32 有機質が多い灰色砂質土
33 有機質を含む灰色砂質土
34 砂
35 有機質を含む灰色砂質土
36 砂
37 濁灰褐色粘質土（撹乱土）
38 灰色砂
39 灰色粘質土
40 淡灰白色粘質土
41 灰色砂層が入る灰色粘質土
42 灰色砂層が入る有機質を含む灰色粘質土
43 若干砂層が入る褐色粘質土
44 砂層が入る褐色粘質土
45 有機質が多い褐色粘砂質土
46 灰色砂層が入る褐色粘質土
47 褐色粘質土
48 有機質を多く含む褐色粘質土
49 有機質が特に多い褐色砂質土
50 有機質が特に多い濃褐色粘質土
51 少量の有機質が入る白灰色砂質土
（縄文時代の遺物包含層）
52 地山（松江層）

第Ⅵ層
第Ⅰ層
第Ⅶ層
第Ⅴ層
第Ⅷ層



第５図－２　調査区東壁セクション図

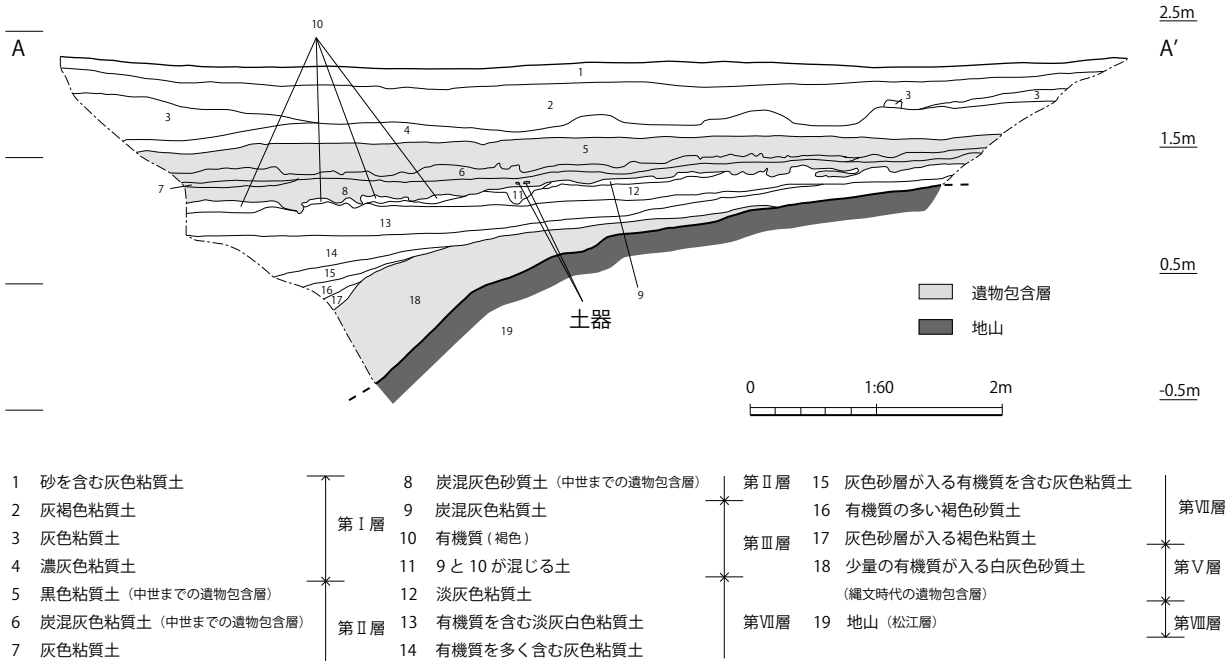
東側で厚く堆積している。下方からは縄文時代前期の土器１点が出土した。

第Ⅷ層は松江層と呼ばれる砂質土で、このあたりに広くみられる地山である。松江層は汽水に堆積した層で、ここでの性格は前述したとおりである。地山は調査区の北と南で検出したが、中央部分は西に湾入しているため検出できていない。

以上、これら各層の観察結果から推察すると、第Ⅲ層以下の土層には未分解の有機質が含まれることから、水際もしくは水面下で堆積した土層と考えられる。これらの層が全体としては東方へ向けて下がり、かつ調査区中央部へ向けても下がるのは、東向きに開いた湾状の旧地形（地山）の影響を受けた結果と考えられる。第Ⅱ層はこの場所が陸地化した後、中世頃の耕作土と推察する。

次節では、これらグルーピングした各層位から出土した遺物について、下層から順に記載する。取り扱う遺物包含層は第Ⅴ層、第Ⅳ層、第Ⅱ層、第Ⅰ層である。

注（1）渡辺正巳氏のご教示による。



第６図　調査区南壁セクション図

第３節　遺物

黒田下屋敷遺跡では、遺物包含層（第Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ層）を確認した。以下では、第Ⅰ層から出土した特徴的な遺物を含めて、古い層位から順に詳述する。

第１項　第Ⅴ層出土遺物

第Ⅴ層は地山直上に堆積した、少量の有機質を含んだ白灰色の砂質土である。基本的には斜面上方の南西から流れ込んだものと思われる。この層の下層、地山直上に近い標高 22.0㎝から縄文土器が 1 点出土した。

①縄文時代の土器

第 7 図 1 は胴部が屈曲する深鉢で、外面は肩部から頸部の立ち上がりにかけて 4 段の小さな爪形文がめぐらされ、内面は二枚貝条痕で調整されている。羽島下層Ⅱ式に比定され、前期でも早い時期に位置づけられる。内面の条痕凹部には薄く炭化物が付着している。

第２項　第Ⅳ層出土遺物

第Ⅳ層は有機質を含む褐色砂質土である。木葉や小枝が腐食せずに残っていたので、湿地もしくは当時の宍道湖汀線付近に堆積した層と思われる。東に向かって緩やかに傾斜するため、基本的には西側丘陵から流れ込んだものと思われる。Ｄ４～Ｄ７区、Ｅ４～Ｅ７区に広がりがみられ、縄文土器コンテナ 2 箱、石器 1 点が出土した。

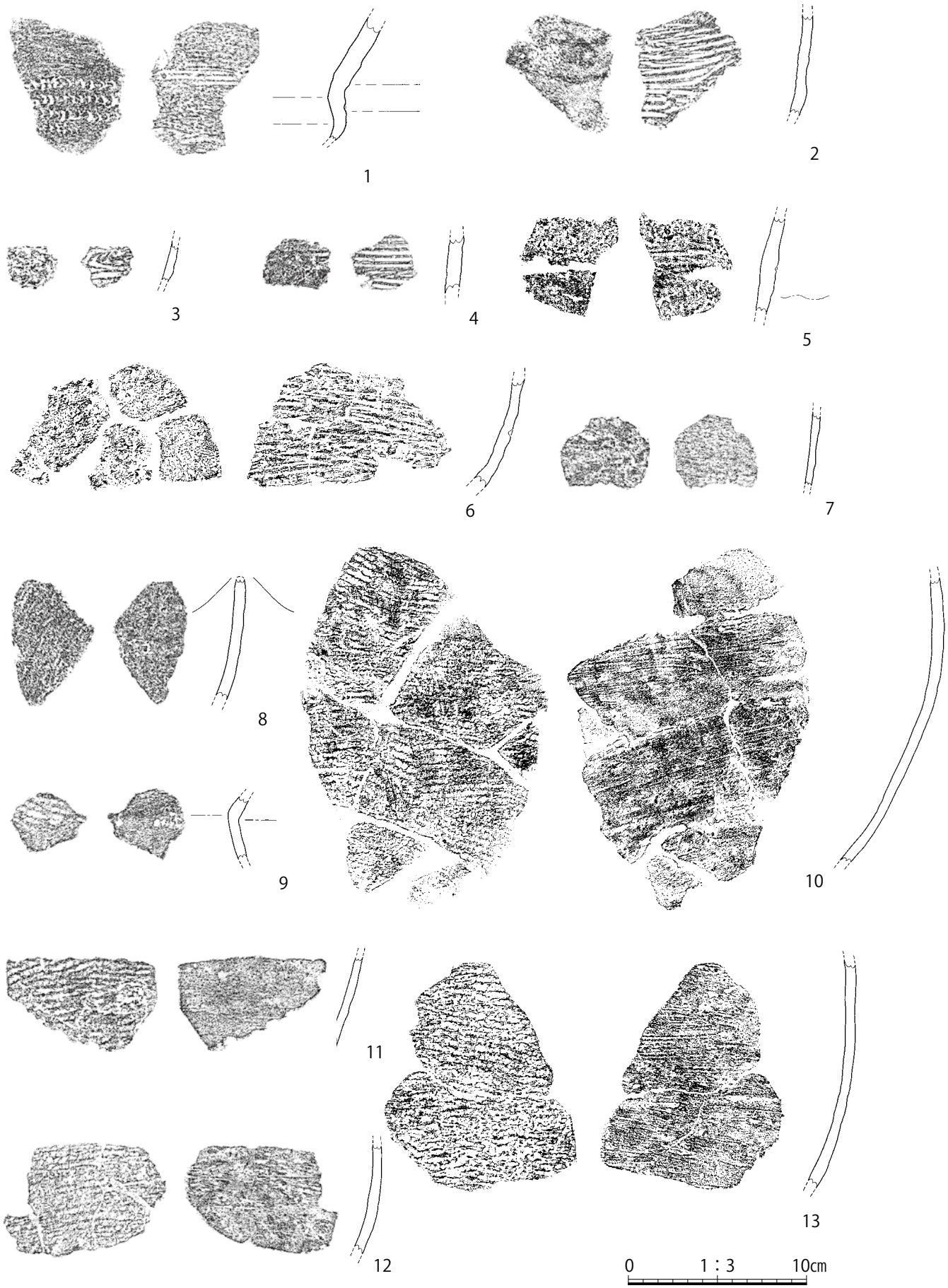
①縄文時代の土器

第 7 図 2 ～ 13、第 8 図 1 ～ 5 は縄文土器の深鉢である。

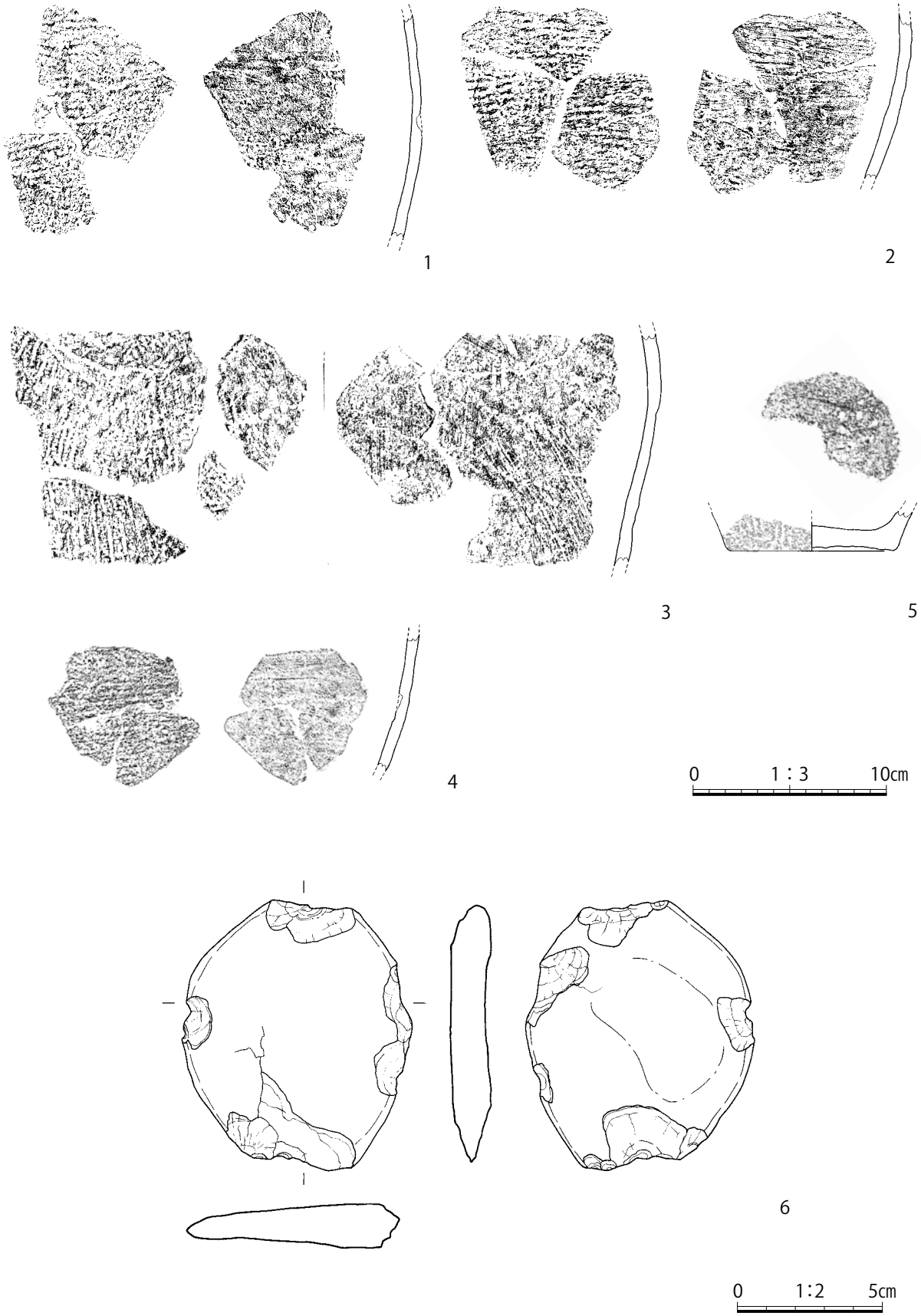
第 7 図 2 ～ 7 は内面がすべて二枚貝条痕であることから、第Ⅴ層出土の深鉢（第 7 図 1）と同じ頃、羽島下層Ⅱ式並行期の深鉢と考えられる。第 7 図 7 ～ 13、第 8 図 1 ～ 5 は時期判別の要素に乏しいものばかりであるが、外面がほぼ縄文であることから、おおむね前～中期初頭頃の深鉢と思われる。以下で詳細を述べる。

第 7 図 2 は外面無文、内面が二枚貝条痕で、内面のところどころに炭化物が付着している。3 は外面風化、内面が二枚貝条痕で、内面に若干の炭化物が付着している。4 は内外面とも二枚貝条痕で、条痕の凸面には細かい筋が入る。5 は外面が無文、内面が二枚貝条痕で、内面に厚く炭化物が付着している。6 は外面が風化、内面が二枚貝条痕で、内面に炭化物が付着している。7 は外面無文、内面が二枚貝条痕で、内面のところどころに炭化物が付着している。8 は波状口縁の一部で、外面が縄目（無節）、内面は厚く炭化物が付着しているため調整不明である。9 は全体の形状はわからないが、屈曲部分である。外面が縄文（無節）、内面は風化のため調整不明で、外面屈曲部に炭化物の付着がみられる。10 は外面が縄文（無節）、内面が巻貝条痕で、外面の上半分に厚く炭化物が付着している。11 は外面が縄文（無節）、内面は風化のため調整不明、外面には厚く炭化物が付着している。12 は外面が縄文（無節）、内面が巻貝条痕で、外面には部分的に炭化物が付着している。13 は外面が縄文（無節）、内面が巻貝条痕で、外面には厚く炭化物が付着している。

第 8 図 1 は外面が縄文（無節）、内面が巻貝条痕で、外面には厚く炭化物が付着し、内面にも若干



第７図　第Ⅴ・Ⅳ層出土遺物実測図

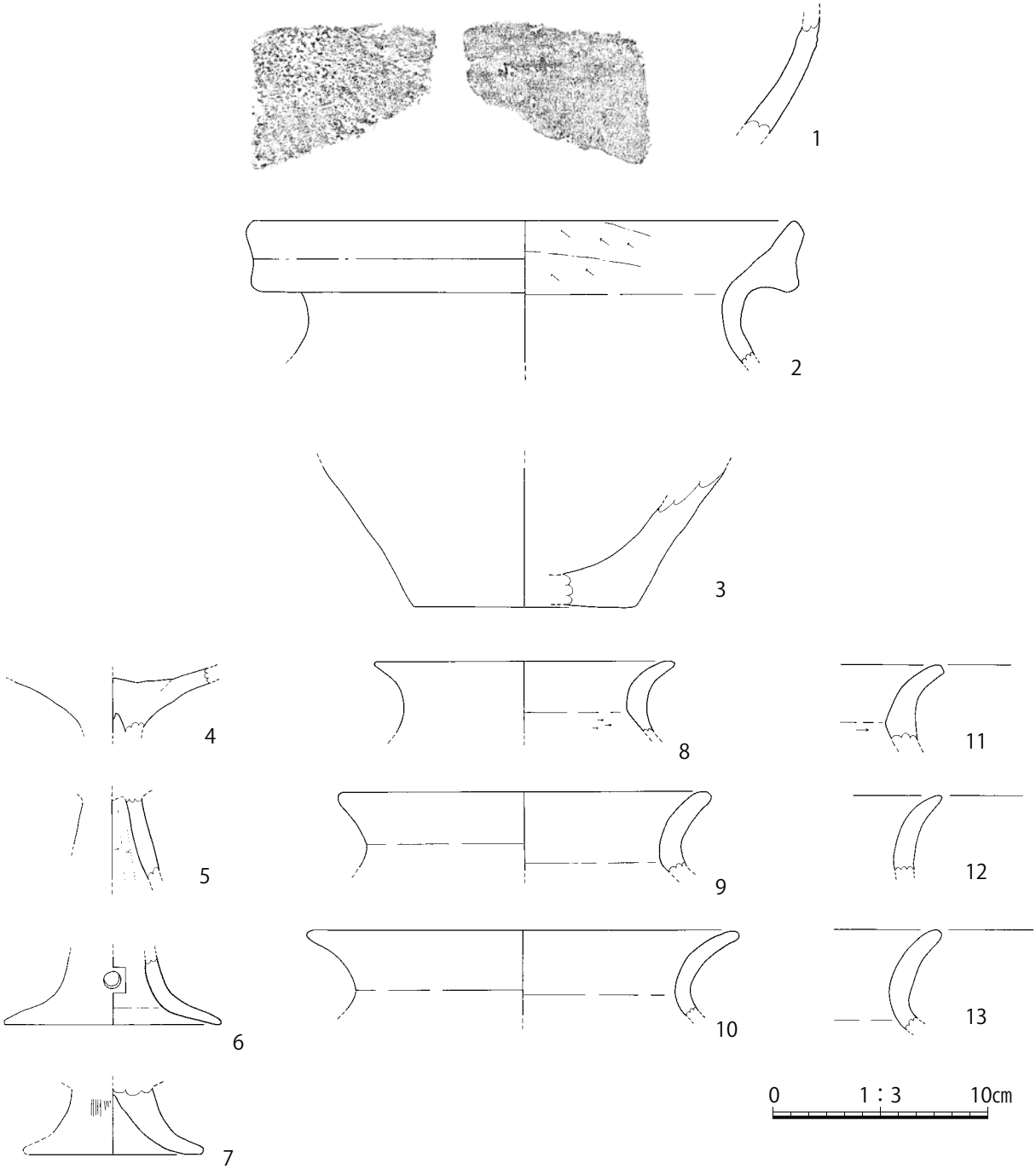


第８図　第Ⅳ層出土遺物実測図

の炭化物が付着している。２は外面が縄文（無節）、内面が巻貝条痕で、外面には厚く炭化物が付着している。３は外面が縄文（ＲＬ）、内面が巻貝条痕で、外面には薄く、内面は下方を中心に厚く炭化物が付着している。４は外面が縄文（無節）、内面が巻貝条痕で、外面には厚く炭化物が付着し、内面の条痕凹部にも炭化物が付着している。５は底部で、外面は立ち上がりが縄文（ＲＬ）、底部は剥離、内面は巻貝またはナデ調整と思われる。底径 8.7㎝を測る。

②石器

第８図６は石器、錘である。扁平で楕円形を呈する自然石に、上下左右の合計４か所を打ち欠きを施して作られたものである。縦 8.9㎝、横 7.9㎝、厚 1.3㎝、重量 130 ｇを測る。



第９図　第Ⅱ層出土遺物実測図（1）

第３項　第Ⅱ層出土遺物

第Ⅱ層は、①黒色粘質土層、②炭混灰色砂質土層、③炭混灰色粘質土層の３層が連続して堆積した遺物包含層である。３層とも出土遺物の時期、土器の細片化や摩耗の度合いに共通性が見られることから、大きな時期差はないと判断して１つの遺物包含層として取り扱う。この層は調査区全面に広がっており、西から東、北から南に向けて緩やかに傾斜しているので、基本的には西側丘陵からの流れ込みと思われる。出土した土器は細片化しており、摩耗が著しく、割れ口が丸味を帯びていることが特徴である。とりわけ①から出土した土器の細片化が著しい状態であったことは、①が上下理面の擾乱から耕作土として機能していた可能性を補強するものといえるかもしれない。

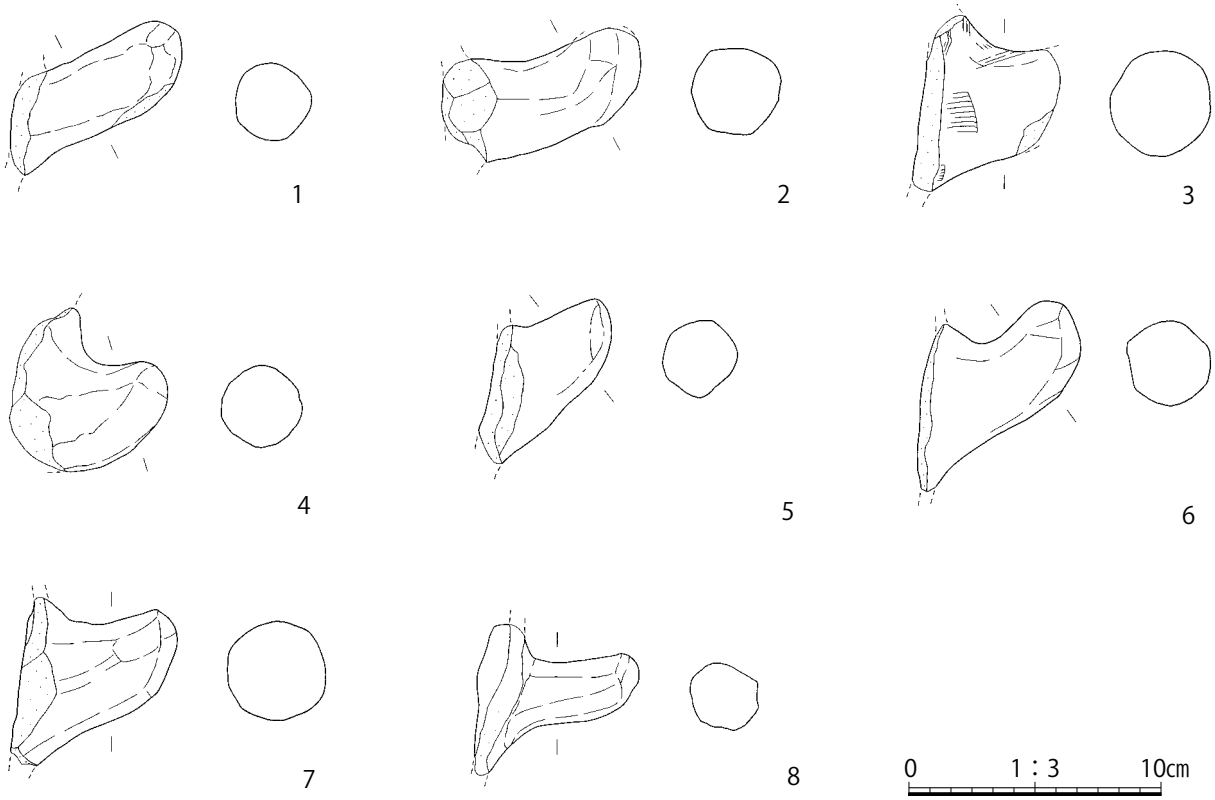
第Ⅱ層からは古墳時代後期を中心とした縄文時代～中世までの遺物が出土しており、縄文土器２点、弥生土器２点、土師器コンテナ７箱、土製品コンテナ３箱、須恵器コンテナ 11 箱、陶器１点、石器コンテナ４箱が出土した。

①縄文時代の土器

第９図１は縄文土器で、同じ個体と思われる２点が出土した。風化が著しく調整は不明だが、後期頃の浅鉢と思われる。

②弥生時代の土器

第９図２、３は弥生土器で２点出土した。２は後期の甕の口縁部で、厚みのある複合口縁の内面はケズリだけでナデやミガキは施されていない。口径25.4㎝を測る。３は底部付近で底径10.4㎝を測る。



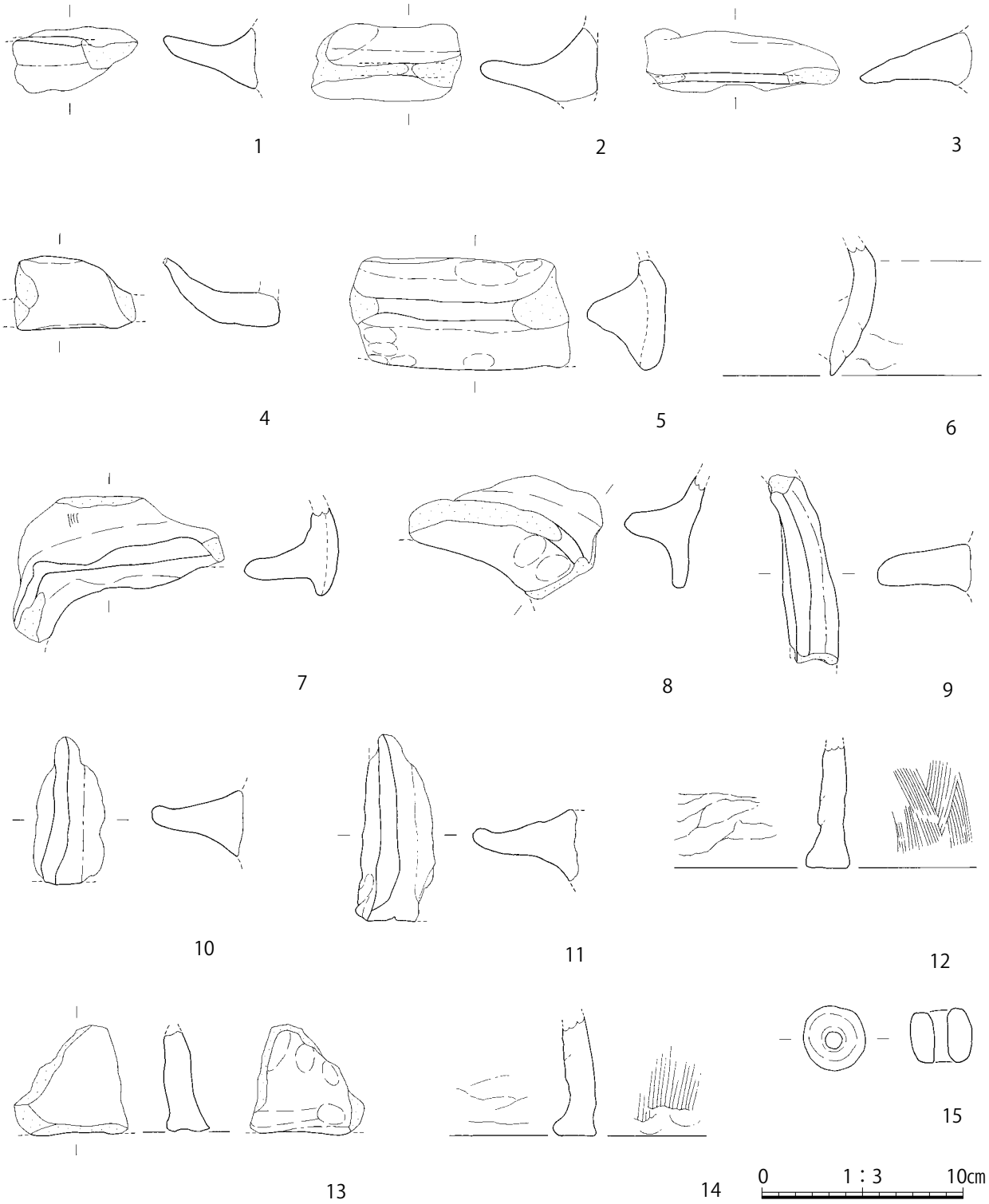
第 10 図　第Ⅱ層出土遺物実測図(2)

③古墳時代の土器・土製品

【土師器】

第 9 図 4 ～ 13、第 10 図は古墳時代の土師器である。

第 9 図 4 は高坏の坏の底部で、円盤充填で製作されている。5 は高坏の脚の筒部で、内面は横方向



第 11 図　第Ⅱ層出土遺物実測図(3)

のケズリが施されており、上端には円盤充填の痕跡が残る。6 は高坏の脚の底部で内外面は風化している。孔径 0.8㎝、底径 10.2㎝を測る。7 は前期の低脚坏の脚部である。外面は縦方向のハケメで裾部付近と内面は横ナデが施されている。底径 8.4㎝を測る。8 ～ 13 は甕もしくは甑の口縁部である。いずれも風化が著しいが、8、11 は内外面の横ナデ、胴部内面のケズリが認められる。8 は口径 13.8㎝、9 は口径 16.8㎝、10 は口径 19.6㎝を測る。

第 10 図 1 ～ 8 は甑の把手部分である。3 はハケメ、6 にはハケメの痕跡がかすかに認められるが、その他は風化が著しく、成形時の工具やナデの稜線がかろうじて残るものである。

【土製品】

第 11 図は古墳時代の土師質土製品である。

1 ～ 14 は移動式竈である。1 ～ 4 は焚口上部の庇部分で、1、3 の下面には被熱による変色がみられる。2、3 は風化のため不明である。5 ～ 8 は焚口側の端部が残る庇部分である。5 は上部と庇の先端を欠損するが、焚口の外面と端部は横ナデ、内面には指押えで調整されている。器壁内面には被熱による変色が見られる。6 はわずかに焚口の端部が残るもので、庇部分は欠損している。内面には被熱による変色が見られる。7 は焚口の左上隅にあたる部分で、外面は庇から上方に向けてハケメ、内面はナデが施されている。庇の下面と器壁内面には被熱による変色が見られる。8 は焚口の右上隅にあたる部分で、焚口端部はケズリで滑らかな弧に仕上げられている。焚口端部と器壁内面には被熱による変色が見られる。9 は焚口側面にあたる突起部と思われ、若干の円弧を描いている。風化のため調整不明である。10、11 は焚口の接地部付近の突起部分で、内外面には上下方向のナデが施され、内面には被熱による変色が見られる。11 の接地面には木目の痕が認められる。12 ～ 14 は焚口以外の接地部付近で、12 と 14 は外面が縦方向のハケメ、内面が横方向の雑なナデで、12 の接地面はハケメ、14 の接地面はケズリが施されている。13 は風化のため外面は調整不明、内面はナデが施されている。3 点とも器壁内面には被熱による変色が見られる。

15 は土玉である。直径 3.1㎝、厚 2.7㎝、孔径 1.2㎝を測る。

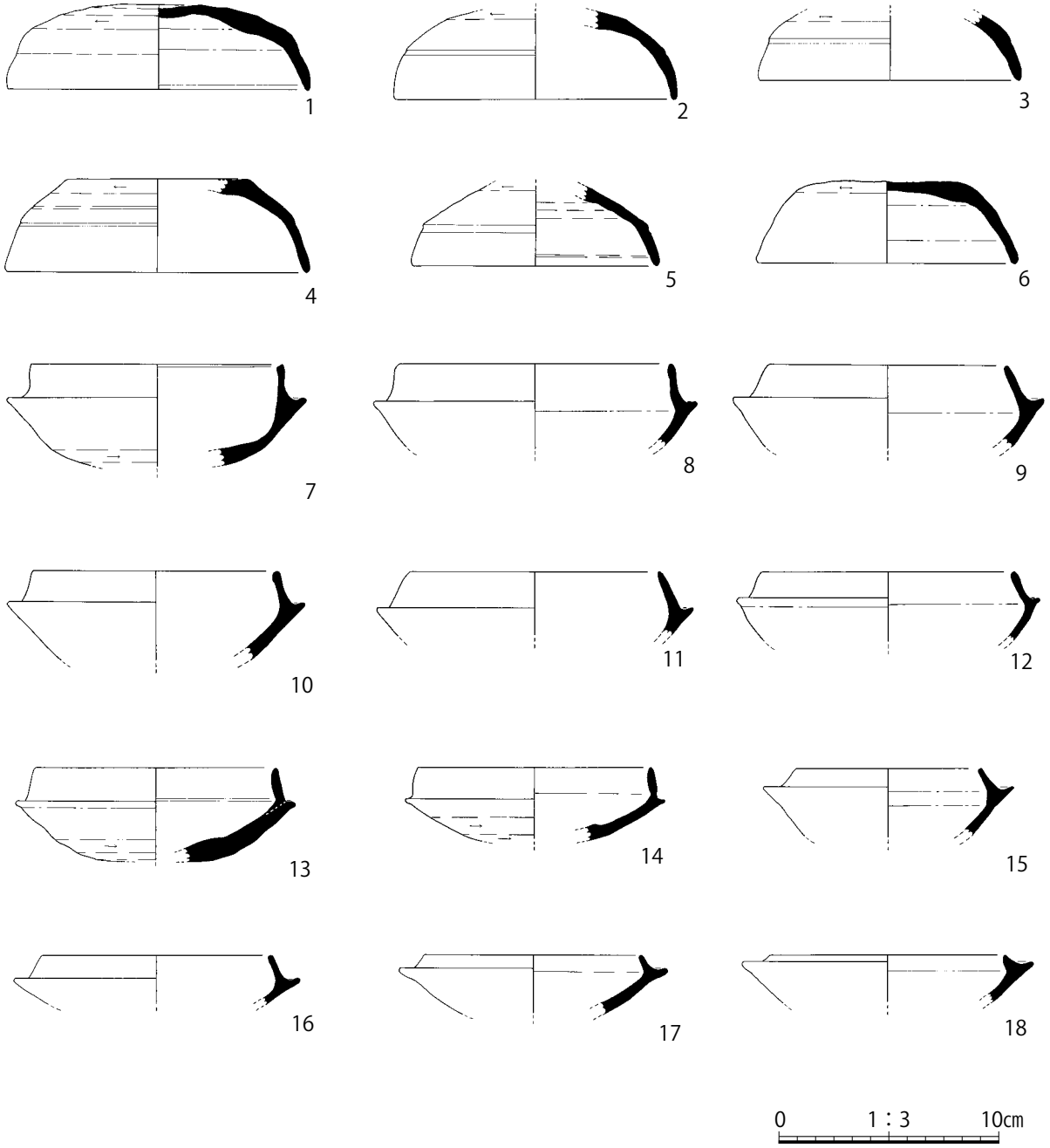
【須恵器】

第 12、13 図は古墳時代の須恵器である。

第 12 図 1 ～ 6 は坏蓋で、1 は口縁部と天井部の境に段を有しないが、口縁部の上から 3 分の 1 くらいのところでくぼみが一周している。天井部は中央部まで回転ヘラケズリが施され、口縁端部内面は器壁をわずかに薄くして段としている。口径 13.8㎝、器高 3.9㎝を測る。2 は口縁部と天井部の境に凹線がめぐらされ、天井部は回転ヘラケズリが施されている。口縁端部内面は、端部の少し凹線がめぐらされている。口径 12.7㎝を測る。3 は口縁部と天井部の境は口縁部の器壁を薄くして段となしている。口径 12.0㎝を測る。4 は口縁部と天上部の境に凹線がめぐらされ、天井部の約半分くらいの狭い範囲に回転ヘラケズリが施されている。口径 14.0㎝、高さ 4.3㎝を測る。5 は口縁部と天上部の境に凹線がめぐらされ、残存する天井部には回転ヘラケズリ後に回転ナデが施されている。口径 11.2㎝を測る。6 は口縁部と天井部の境が無く、天井部は回転ヘラ切り後に回転ナデが施されている。出雲 6 期で、口径 11.8㎝、器高 3.8㎝を測る。以上から、坏蓋は出雲 4 ～ 5 期の間に収まると思われる。

第 12 図 7 ～ 18 は坏で、7 は口縁が 1.7㎝と高く、垂直に立ち上がっており、端部内面は斜めに成

形されている。底部は回転ヘラケズリの面積が広い。口径 11.6㎝、受部径 13.6㎝を測る。8 も口縁が 1.7㎝と高く、垂直に立ち上がっている。9 は口縁が 1.7㎝と高いが、やや内傾している。10 は口縁の高さが 1.5㎝で、やや内傾している。11 は口縁が 1.9㎝と高いが、やや内傾している。12 は口縁の高さが 1.5㎝で内傾している。13 は口縁の高さが 1.5㎝で、内傾している。底部は回転ヘラケズリの面積が広い。口径 10.9㎝、受部径 12.8㎝、器高 4.3㎝を測る。14 は口縁の高さが 1.4㎝で内傾している。底部は回転ヘラケズリの範囲が広い。口径 10.6㎝、受部径 12.0㎝を測る。15 は口縁の高さが 1.1㎝と低く、内傾している。16 も口縁の高さが 1.1㎝と低く、内傾している。17 は口縁の高さが 0.8㎝



第 12 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（4）

とさらに低く、内傾している。18 も口縁の高さが 0.7㎝と低く、内傾している。以上から、坏は出雲２～５期の間に収まると思われる。

第 13 図１～４は高坏である。１は脚部で、方形透かしが３方向に配されている。出雲２期で、底径 8.0㎝を測る。２も脚部で二段の方形透かしが２方向に配されている。出雲４期で、底径 9.4㎝を測る。３は坏部底付近で、線状透かしが２方向に配されていたと思われる。４も坏部底付近で、線状もしくは方形透かしが２方向に配されていたと思われる。５は瓹の口縁部で、口径 14.8㎝を測る。６は瓹の孔付近である。７は牛角状の把手で、器種は不明である。直径 1.3㎝、長さ 8.1㎝を測る。２は甑の把手である。

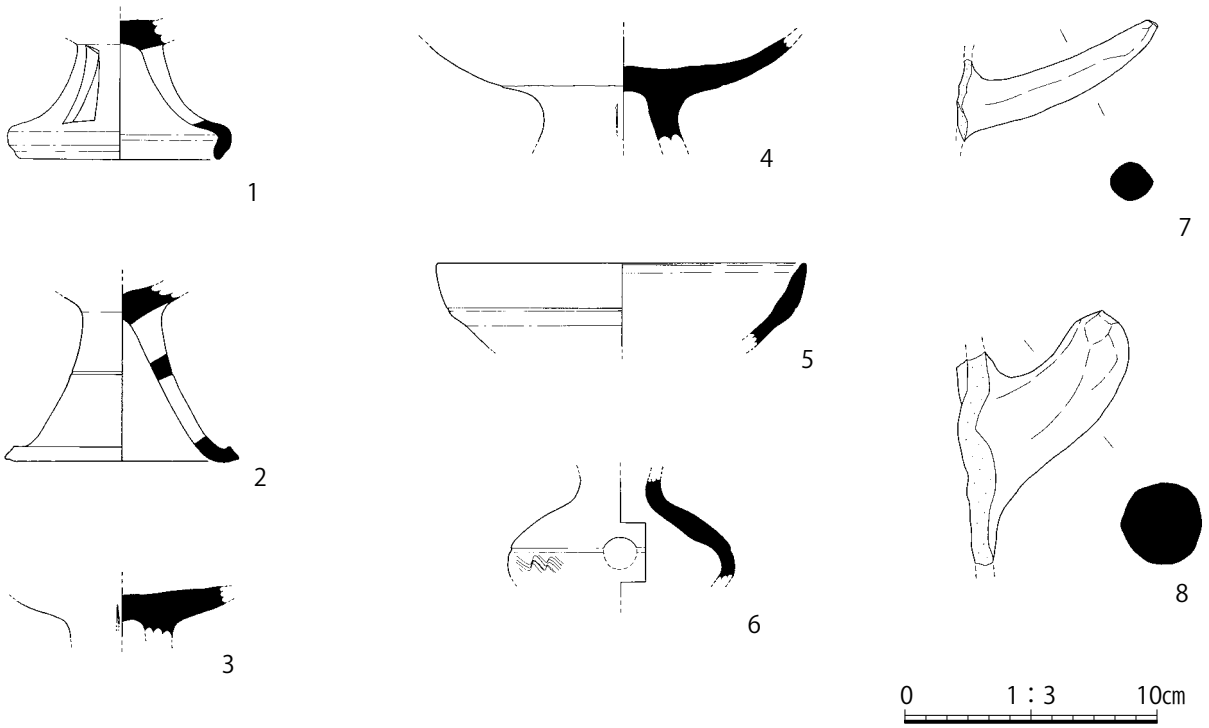
④奈良・平安時代の土器

【土師器】

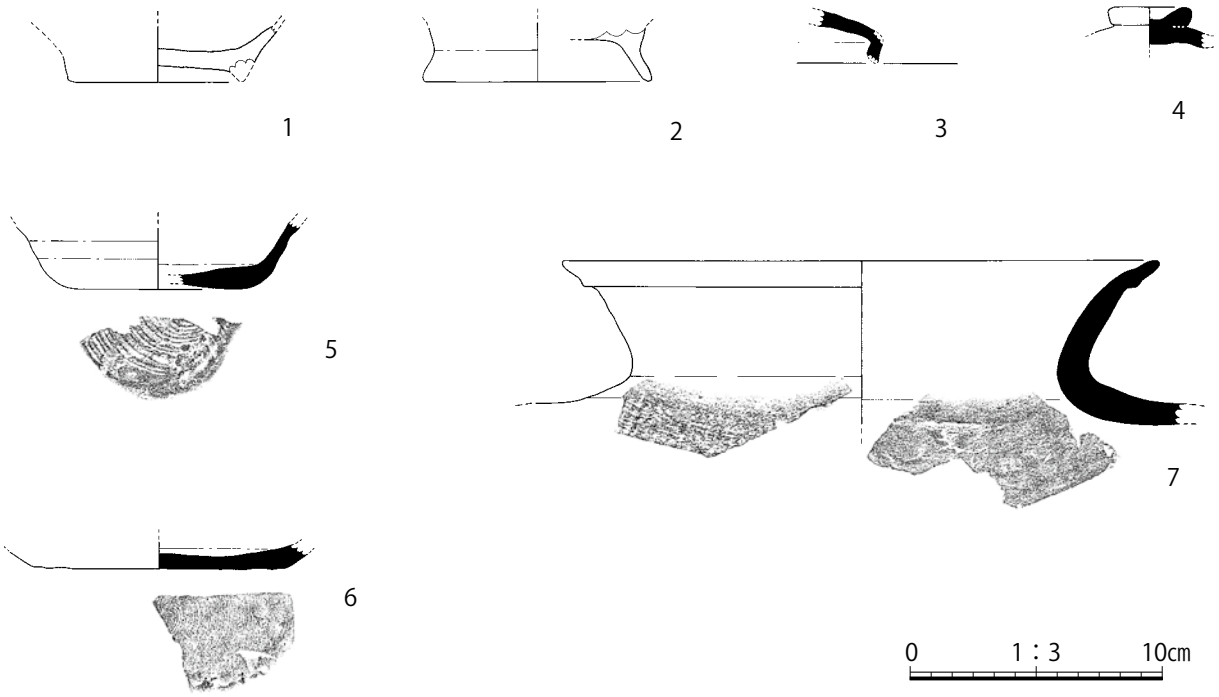
第 14 図１、２は土師器の高台付坏である。風化が著しい。２は底径 8.9㎝を測る。国庁６型式前後と思われる。

【須恵器】

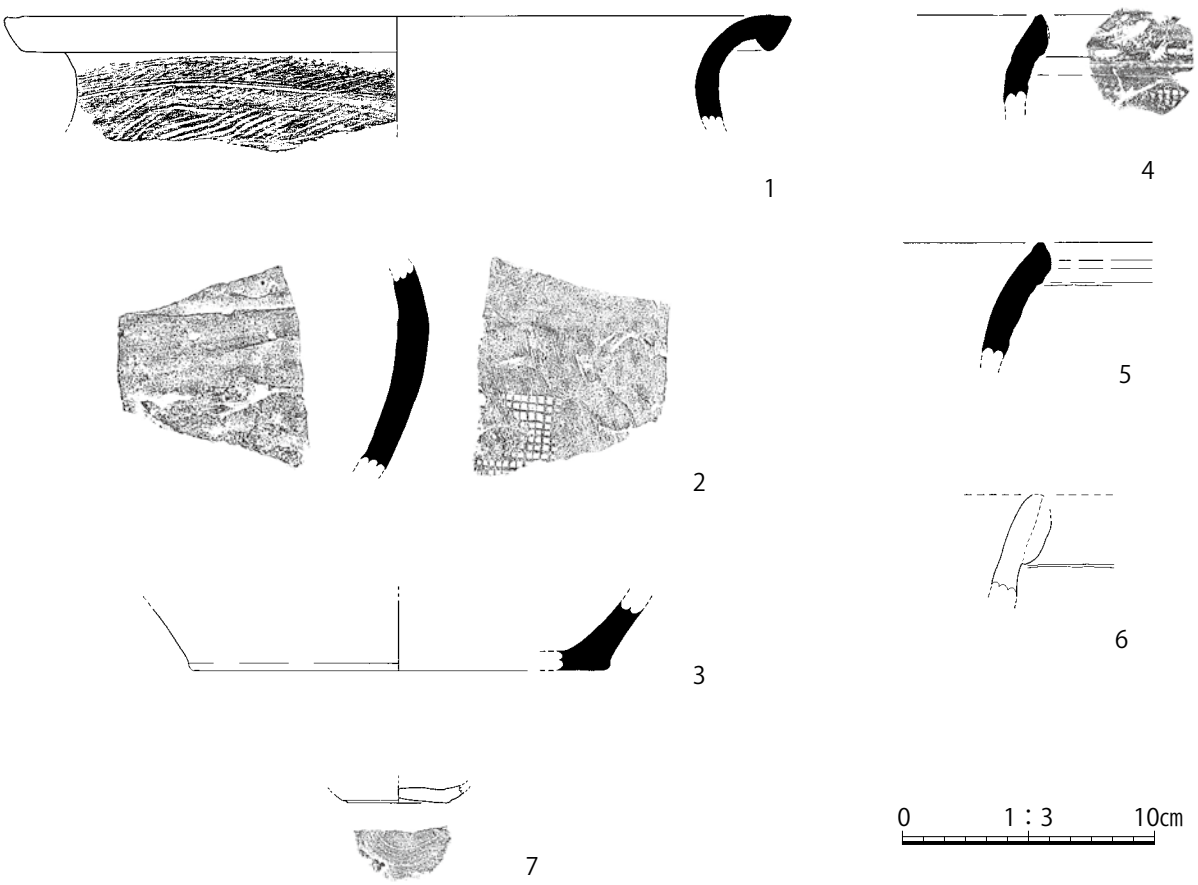
３～７は須恵器で、３は蓋の端部、４は蓋のつまみ部分である。５は無高台の坏で、底径 6.6㎝を測る。６は皿の底部で、底径 10.1㎝を測る。７は甕の口縁部である。体部外面は平行文タタキで、残存する内面はナデ範囲が広く、円形文タタキは見られない。口径 23.7㎝を測る。３は第２形式だが、そのほかは破片が小さいため分類はできない。



第 13 図　Ⅱ層出土遺物実測図（5）



第 14 図　第Ⅱ層出土遺物実測図 (6)



第 15 図　第Ⅱ層出土遺物実測図 (7)

⑤中世の土器

【須恵器】

第 15 図 1 ～ 5 は中世須恵器で、14 ～ 15 世紀にかけて製作されたものである。1 は甕の口縁部で、外面は口縁端部手前まで平行タタキ、内面は回転ナデが施されている。口径 31.4㎝を測る。2 は甕の体部で、外面は格子タタキ、内面は粗いナデが施されている。3 は甕の底部で、内外面とも回転ナデ調整である。底径 16.4㎝を測る。4 は鉢の口縁部で、外面は格子タタキ、内面は回転ナデが施されている。5 も鉢で、外面は風化、内面は回転ナデが施されている。

【陶器】

第 15 図 6 は備前焼の甕で、玉縁の口縁部分である。室町時代前半のものである。

【土師器】

第 15 図 7 は土師器の皿である。底部外面には回転糸切り痕が残る。底径 4.0㎝を測る。

⑥石器類

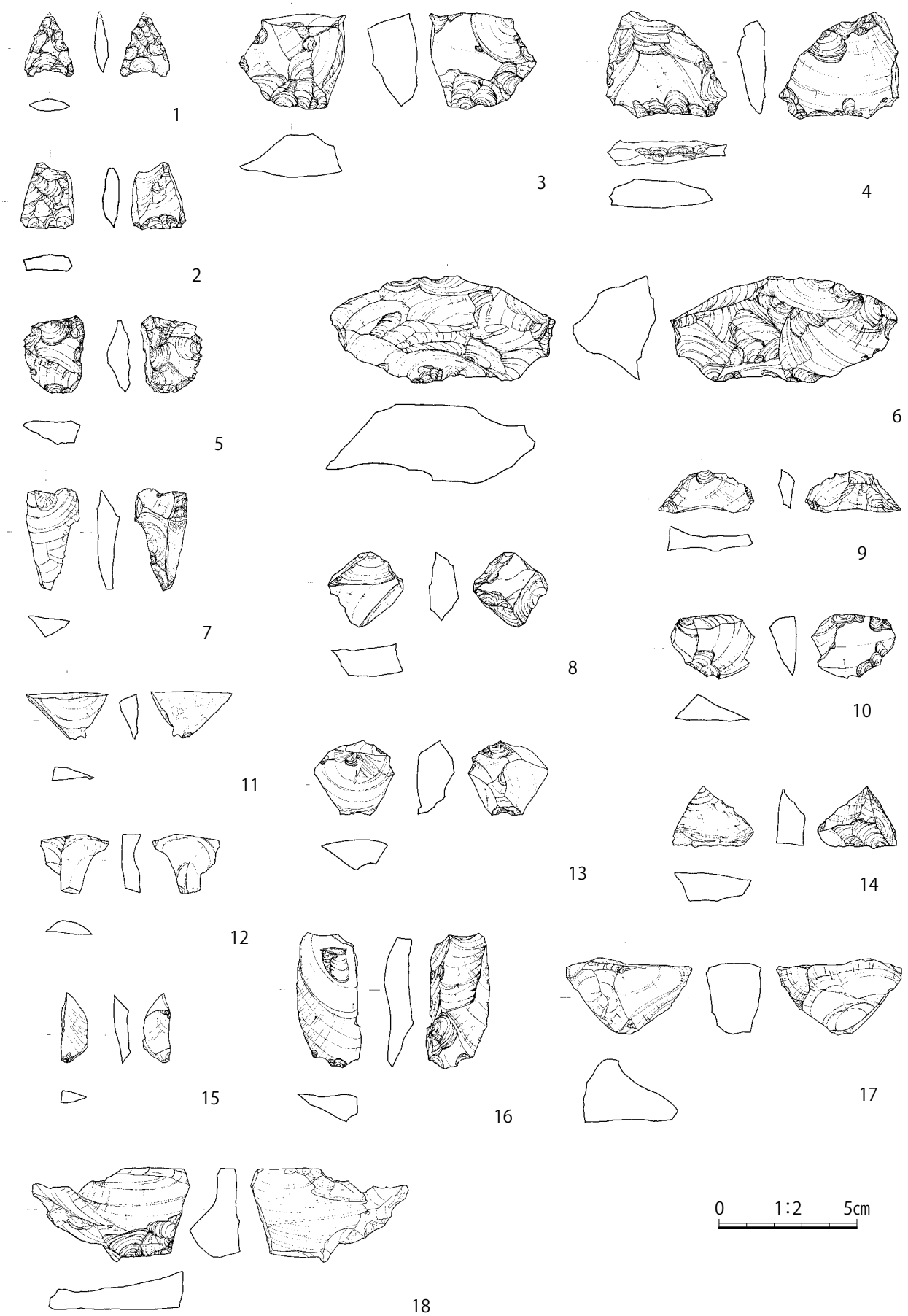
第 16 ～ 22 図は石器類である。

第 16 図、第 17 図 1・2 は、黒曜石製の石器と剥片である。多くの剥片が出土したことから、この付近で石器が製作されていたことが窺える。

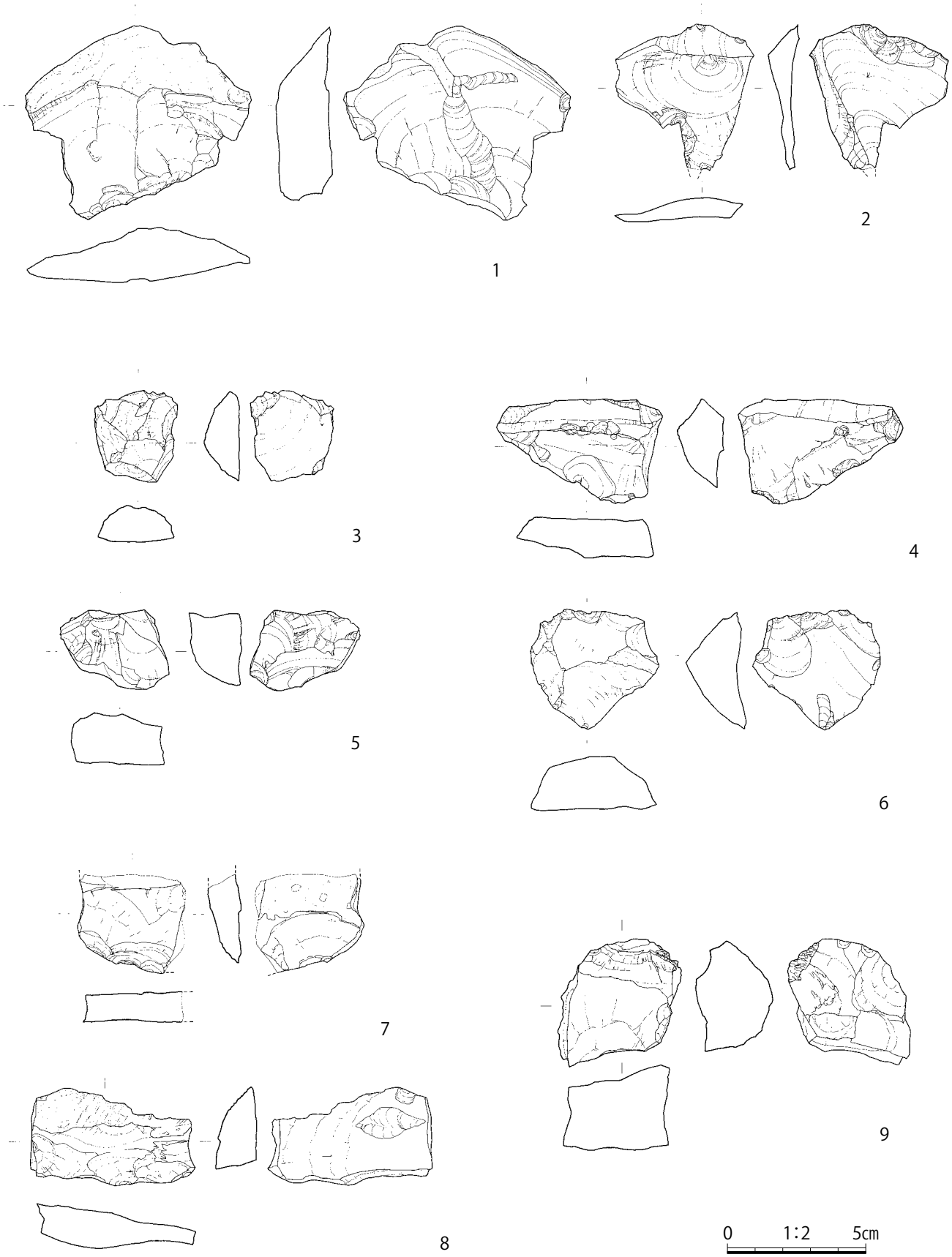
第 16 図 1 は鏃で全長 2.2㎝、幅 1.8㎝、厚さ 0.5㎝を測るが、先端をわずかに欠損している。2 ～ 4 は一辺の両面に連続した剥離がみられるもので、スクレイパーなどの未成品もしくは破損品の可能性がある。2 は縦 2.4㎝、横 1.8㎝、厚 0.55㎝、3 は縦 3.3㎝、横 3.7㎝、厚 1.5㎝、4 は縦 3.8㎝、横 4.4㎝、厚 1.0㎝を測る。5 は全面に剥離痕がみられるが、剥離の大きさや方向に規格制がみられないことから、小石核（残核）と思われる。縦 3.8㎝、横 8.1㎝、厚 2.8㎝、重量 82.7 ｇを測る。6 は押圧剥離が多い剥片で、縦 2.7㎝、横 2.1㎝、厚 0.8㎝を測る。7 ～ 18 と第 17 図 1、2 は、片面もしくは両面に単純な剥離痕がみられるもので、石器作成過程で発生した剥片である。

第 17 図 3 ～ 6 は、石材に玉髄が使用されたものである。いずれも片面もしくは両面に単純な剥離痕がみられるもので、石器作成過程で発生した剥片ある。第 17 図 7 ～ 9 は、石材に安山岩（サヌカイト）が使用されたものである。7 は一辺に連続した剥離痕がみられるので、スクレイパーの未成品もしくは破損品の可能性がある。縦 3.2㎝、横 3.8㎝、厚 1.1㎝を測る。8、9 は片面に単純な剥離痕がみられるもので、石器製作過程で発生した剥片である。第 18 図 1 は擦り石で、表面はよく磨かれて細かい不定方向の擦痕がみられるが、風化が進んで一部が剥落している。片方の先端部には多数の小さな敲打痕が残り、敲打の衝撃は一部では大きな剥離痕となっている。もう一方の先端部は大きく剥離痕が残っており、それが製作時の形状であるのか、使用痕なのか明確ではない。全長 13.0㎝、最大径 6.4㎝、重量 425.0 ｇを測る。2 は石皿で約半分を欠損していると思われる。使用痕が残るのは片面だけで中央付近がくぼみ、小さな敲打痕が多数残っている。縦 13.2㎝、約半分に割れた状態での重量 572.0 ｇを測る。

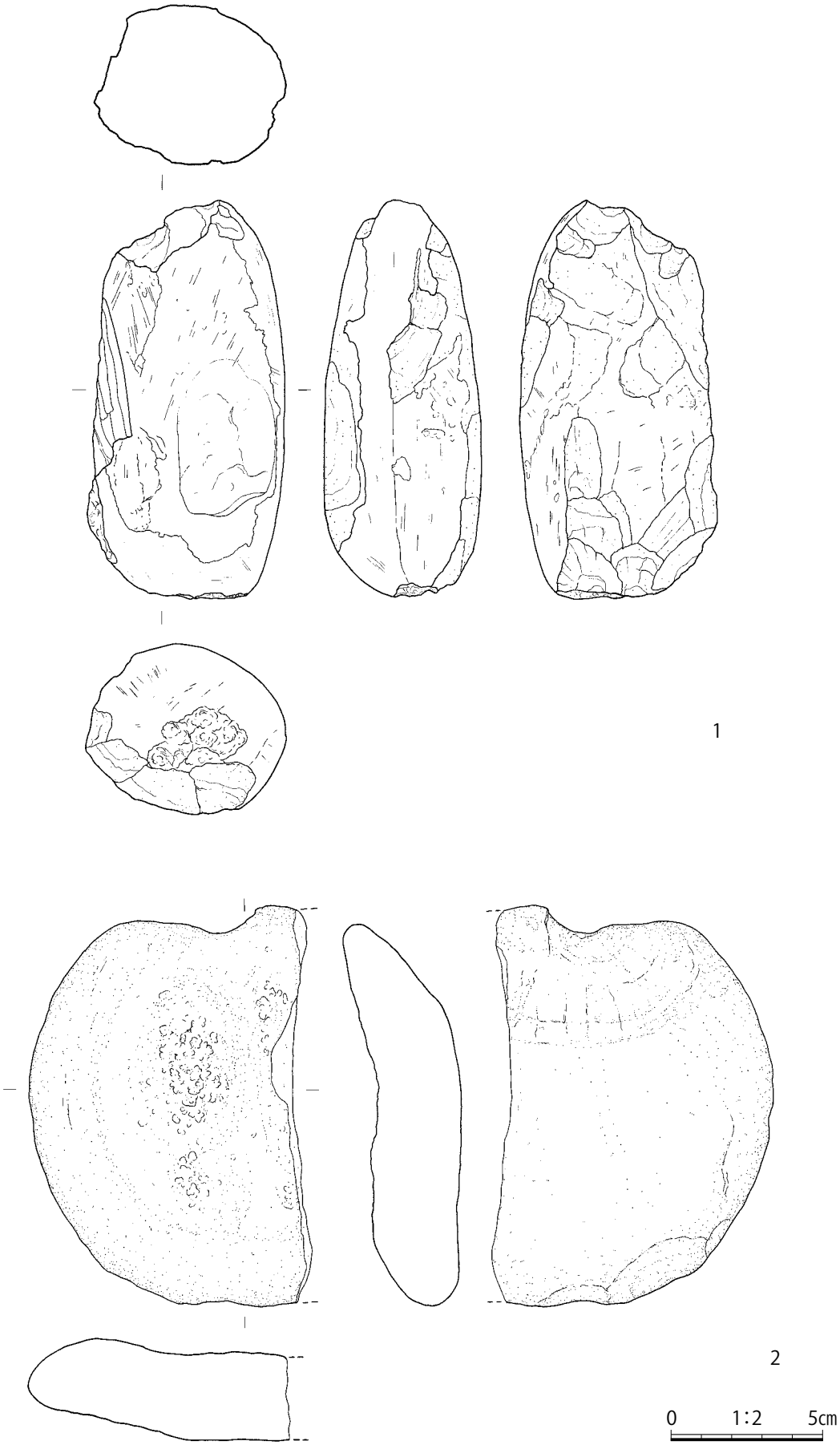
第 19・20 図は石錘で、調査区内から 7 点出土したほか、調査範囲確認調査のトレンチからも 1 点出土した。縄文時代の漁労具であるから、当時の水際や水面下で広く出土することは自然なこと



第 16 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（8）

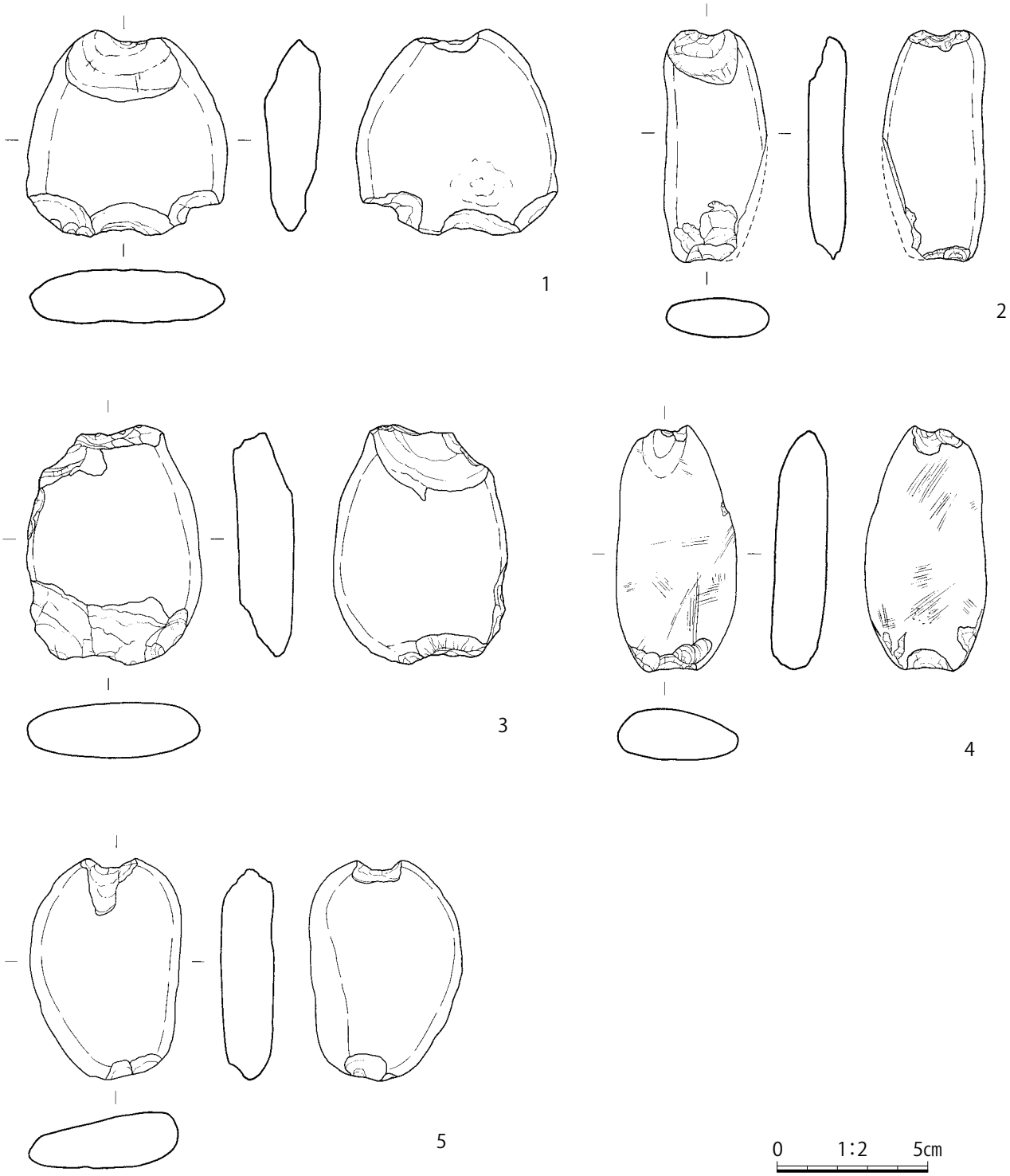


第 17 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（9）



第 18 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（10）

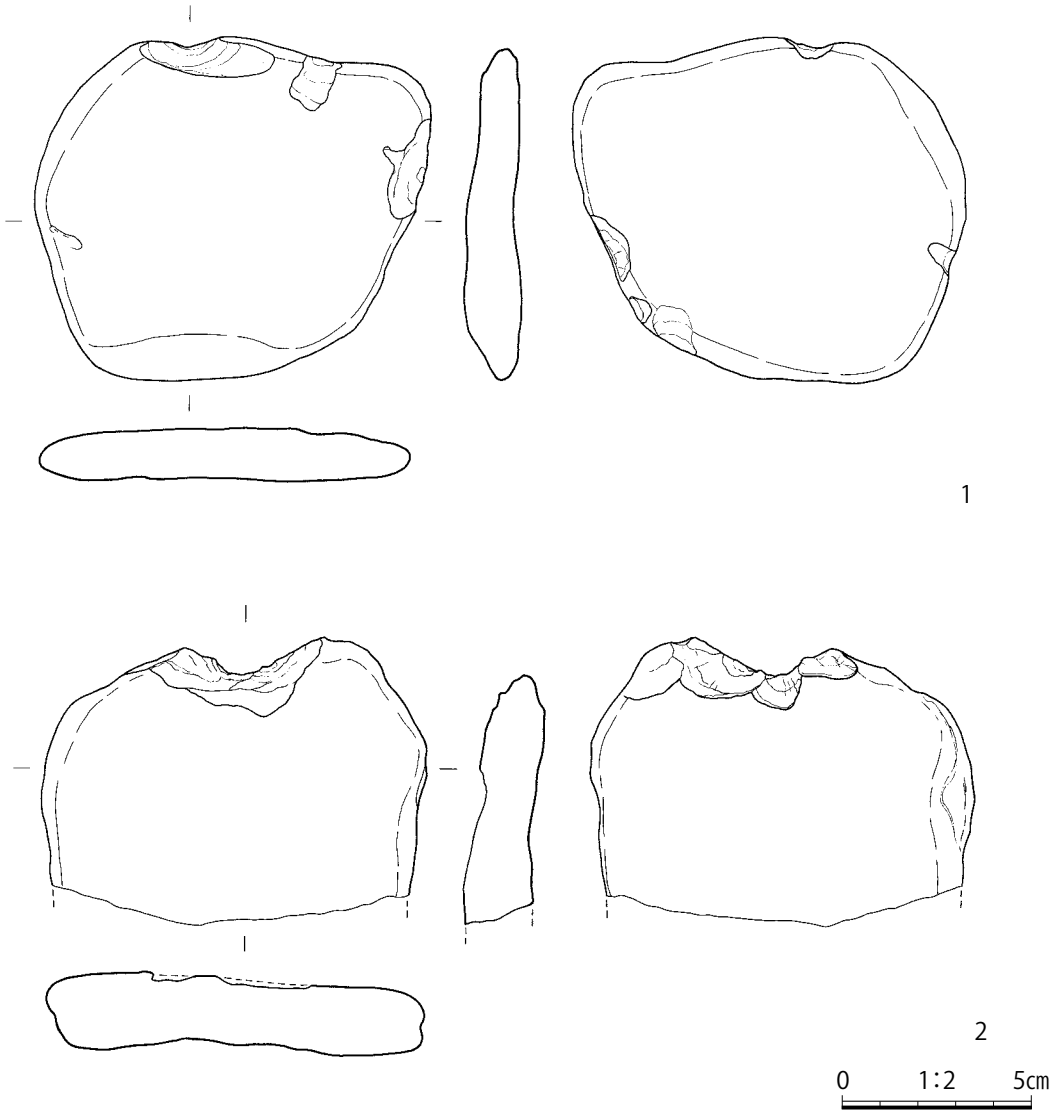
である。石錘はすべて扁平で丸味を帯びた自然石の上下２か所に打ち欠きを施したものである。19図１は重量 116.7 ｇ、２は重量 48.4 ｇ、３は重量 101.8 ｇ、４は表面に擦痕が施されたもので重量 78.9 ｇ、５は重量 89.0 ｇ、第 20 図１は重量 129.5 ｇ、２は約半分割れたに大型の錘で重量 218.5 ｇを測る。



第 19 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（11）

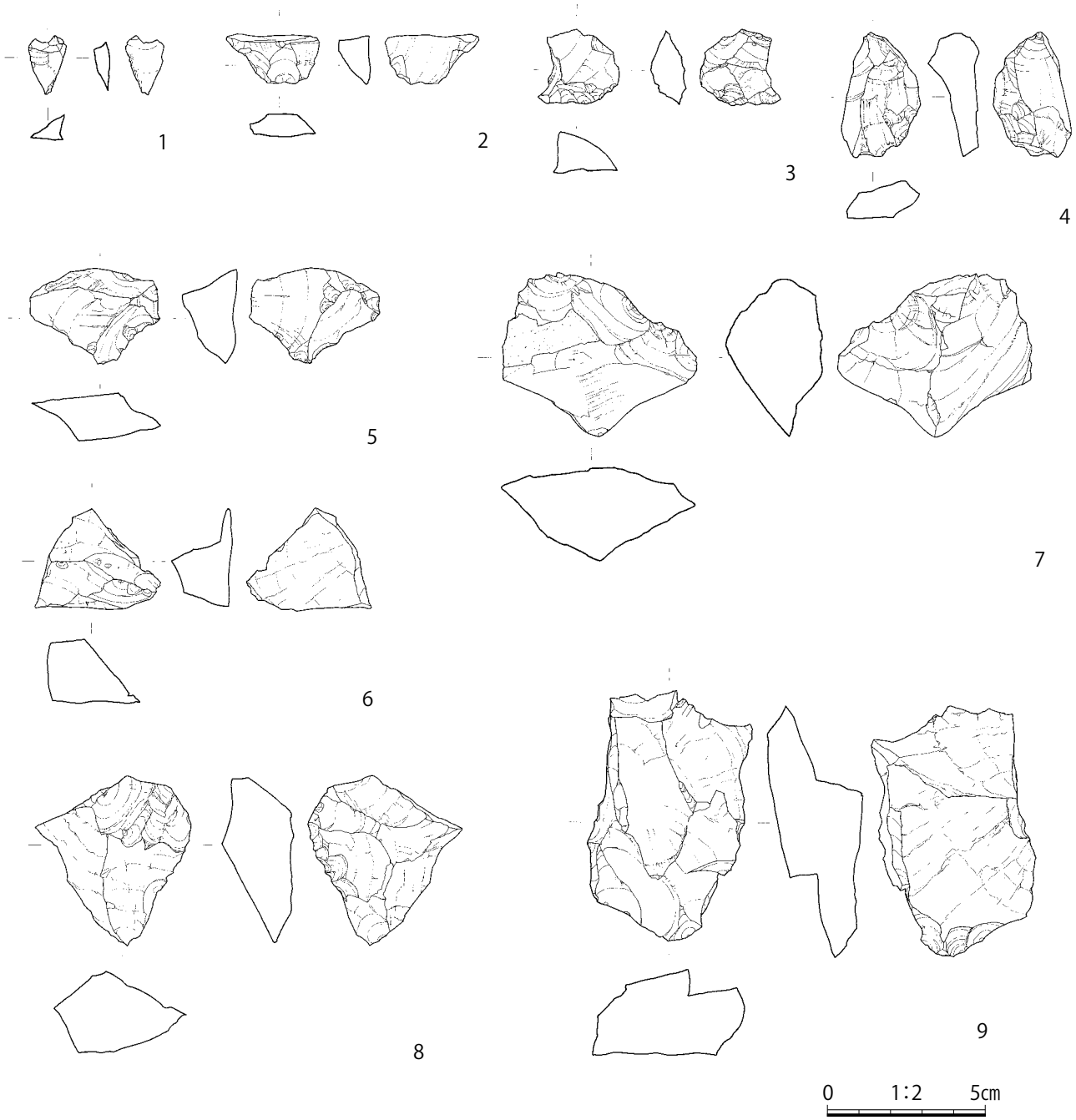
第 21 図 1 ～ 9 は碧玉の破片である。碧玉は玉作りの材料となる石で、宍道湖を挟んで対岸にある玉湯町花仙山周辺でしか産出しない。人為的に持ち込まれたものであることは間違いなく、破片が複数出土したことから、このあたりで玉作りがおこなわれていたことが明らかとなった。

1 ～ 4 は濃緑色で、玉作りの過程で生じた小さな剥片である。1 は縦 1.8㎝、横 1.2㎝、厚 0.8㎝、2 は縦 1.5㎝、横 3.0㎝、厚 1.0㎝、3 は縦 2.4㎝、横 2.2㎝、厚 1.3㎝、4 は縦 4.0㎝、横 2.3㎝、厚 1.5㎝を測る。5 は濃緑色に淡緑色の斑が入る質の悪い剥片で、縦 3.0㎝、横 4.0㎝、厚 1.7㎝を測る。6 は濃緑色の剥片で、縦 3.2㎝、横 3.8㎝、厚 2.0㎝を測る。7 は淡緑色に濃緑色と褐色が帯状に入る質の悪い剥片で、縦 5.0㎝、横 6.1㎝、厚 3.0㎝を測る。8 は濃緑色で、一辺に連続打痕がみられることから、未成品の可能性も考えられる。縦 5.4㎝、横 4.9㎝、厚 2.5㎝を測る。9 は濃緑色で、大きい破片であるが、整形の痕跡は見られない。縦 7.9㎝、横 4.8㎝、厚 3.5㎝を測る。

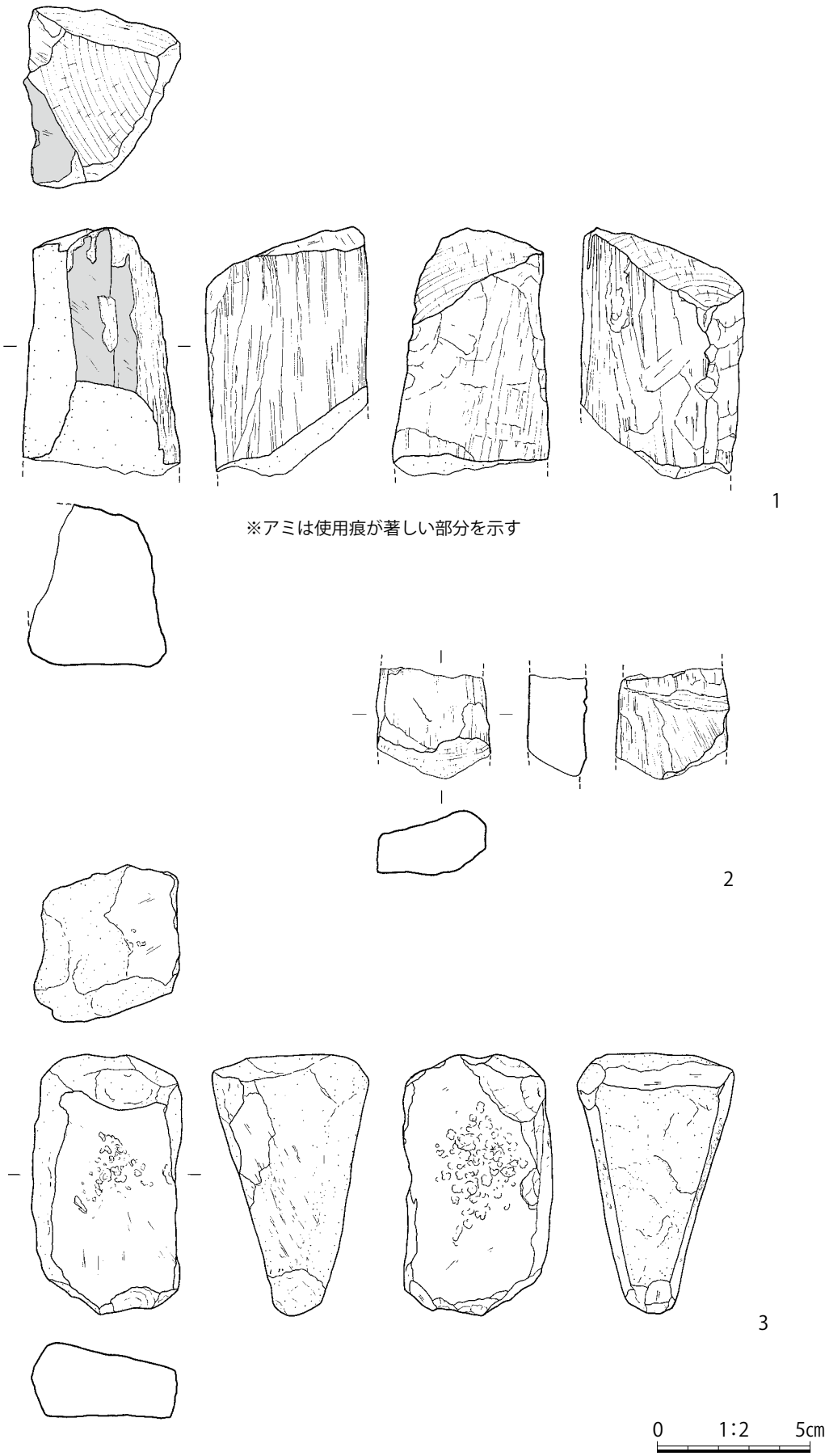


第 20 図　Ⅱ層出土遺物実測図（12）

第 22 図１～３は砥石である。1・2 の石材は珪化木で、玉作りには欠かせない特徴的な砥石であることから、玉作工房の存在を証明するものである。1 はアミかけ部分が最も使い込まれており、他の面にも若干の使用痕がみられる。折れているが残存長 8.0㎝、横 5.1㎝、厚 5.0㎝を測る。2 は上下が折れた珪化木である。使用痕は見られないが出土状況から玉作用に持ち込まれたものと思われる[(1)]。縦 3.3㎝、横 3.6㎝、厚 1.8㎝を測る。3 は砥石で、3 面がよく使い込まれており、砥面には擦痕と敲打痕がみられる。縦 8.6㎝、横 4.7㎝、厚 5.1㎝を測る。



第21図　第Ⅱ層出土遺物実測図(13)



第22図　第Ⅱ層出土遺物実測図（14）

第４項　第Ⅰ層出土遺物

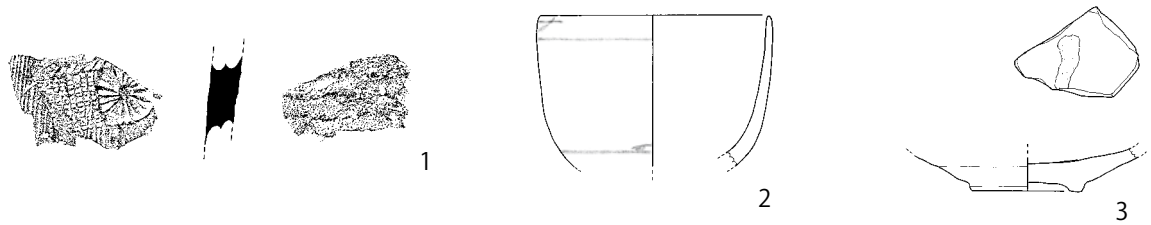
第Ⅰ層は灰色系粘質土がほぼ水平に堆積した層である。ほとんど石を含まないことからも水田耕作土であった可能性が高い。重機で少しずつ剥ぎ取りをおこない遺物の有無に注視したが、遺物の量は少なく、調査区及び範囲確認調査のトレンチから中世の陶器 1 点と近世の磁器 1 点、陶器 1 点が出土した。

①中世の土器

第 23 図 1 は甕の体部破片である。14 ～ 15 世紀の常滑産である。

②近世の土器

第 23 図 2 は肥前染付碗で、呉須は薄い。17 世紀頃のものである。3 は肥前陶器皿である。内外面は透明釉だが、外面の高台周辺は露胎で、見込みには砂目が施されている。17 世紀初頭頃のものである。



第 23 図　第Ⅰ層出土遺物実測図

注（1）本遺跡では第Ⅰ～Ⅳ層の各層とも自然石をほとんど含んでいない状況であった。

第５章　総　括

黒田下屋敷遺跡では、３つの遺物包含層（第Ⅴ、Ⅳ、Ⅱ層）の調査を実施した。標高－ 0.7 ～ 1.0 m以下に堆積する第Ⅴ層と 0.3 ～ 0.75 mに堆積する第Ⅳ層は縄文土器単一の遺物包含層で、その上の標高0.8 ～ 1.5 mに堆積する第Ⅱ層は縄文時代から中世までの幅広い時期の遺物が出土する層である。その他、重機掘削を行った第Ⅰ層からも中～近世の遺物が若干出土している。

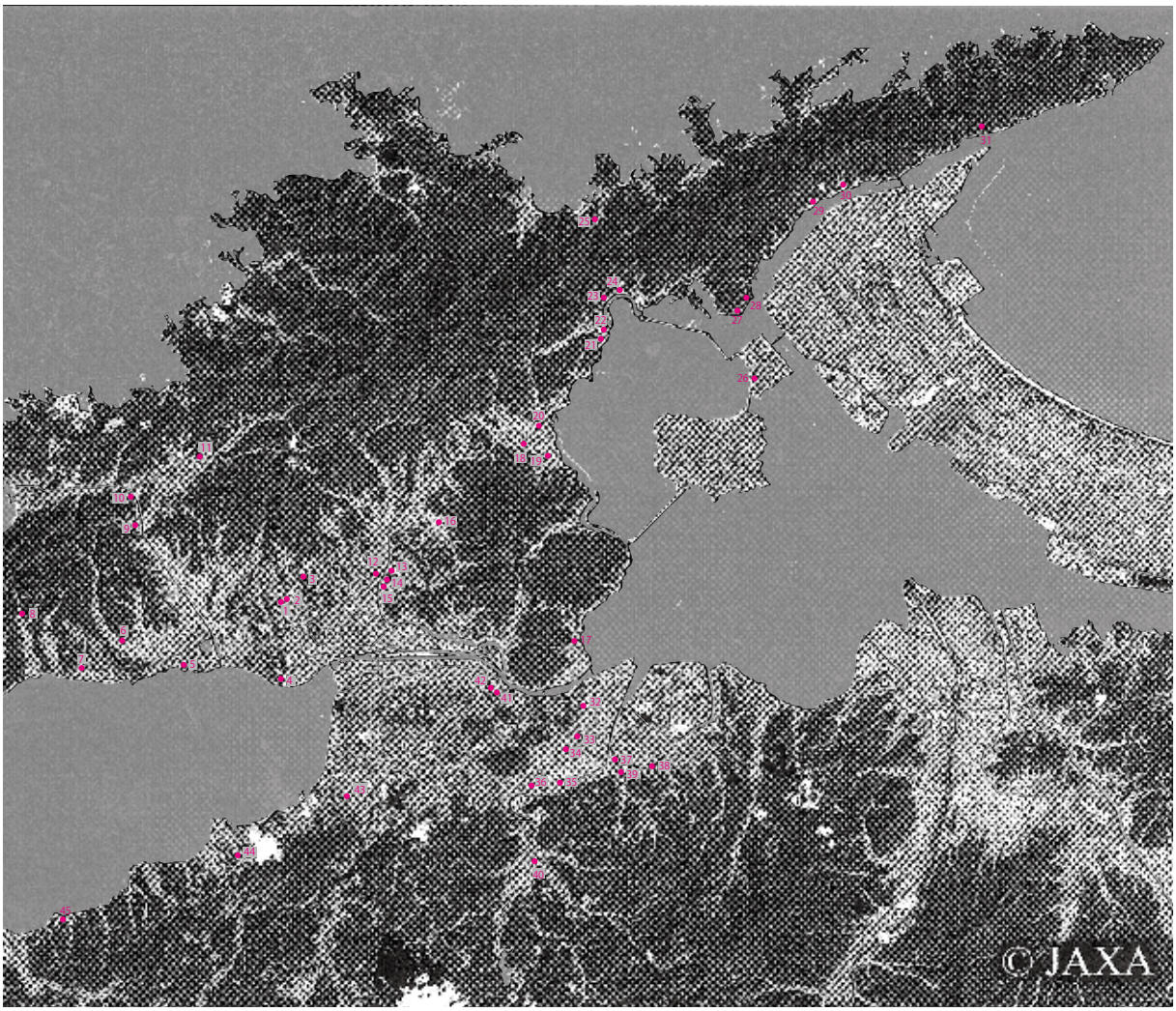
ここでは、遺物包含層の出土遺物から当遺跡周辺の環境を復元してみたい。

第１節　第Ⅴ、Ⅳ層（縄文時代）

調査区南端の地山の上に堆積する第Ⅴ層の少量の有機質が入る白灰色砂質土（第５図 51 層）からは、羽島下層Ⅱ式の土器１点が出土し、縄文時代前期初頭の包含層であることを確認した。また、上層の第Ⅳ層中の木葉や小枝などを含む褐色砂質土（第５図 16 層）からは、前期初頭～中期頃の土器多数と石錘１点が出土し、縄文時代中期頃と思われる包含層であることを確認した。これらの層は、未分解の有機質を多く含んでおり、水面下か湿地のような場所で自然堆積した層と考えられる。検出した標高や周辺の地形からすれば、当地は縄文時代前期から中期におけての古宍道湖の汀線付近と推察される。この他、第Ⅱ層からではあるが、黒曜石製の鏃や剝片、擦り石、石皿、石錘といった石器が多数出土している。これらの詳細な時期は定かでないが、本遺跡から出土した縄文土器は前期初頭～中期の土器が大部分を占めていることから、その頃に使用された石器であろう。これらのことから、古宍道湖の汀線に近い当遺跡周辺において、人々が漁労をおこないながら生活を営んでいた姿が想定される。

次に、第Ⅲ層について言及しておく。第Ⅲ層も第Ⅳ層に酷似した層であり、汀線付近の堆積土と考えて問題ないものと思われる。遺物が出土していないので時期は不明だが、第Ⅳ層の時代に引き続き、第Ⅲ層の時代においても古宍道湖の汀線に近い場所、あるいは汀線部であったようだ。

さて、第 24 図に松江市周辺の縄文時代の遺跡分布を示した。これらの遺跡のうち、自然科学分析により古宍道湖の汀線と確認されているのが島根大学構内遺跡（12）の橋縄手地区である。丸木舟が出土した前期包含層「第 5a1 層」の上に、中期の塩水湿地層「第４層」が堆積している[(1)]。「第 5a1 層」の標高は＋ 0.2 ～＋ 0.6 mにあり、「第４層」の上面は＋ 0.9 m前後である。当遺跡と比較すると、第Ⅲ層の上限が＋ 0.9 mで橋縄手地区の「第４層」上面と同じ値であり、第Ⅳ層が＋ 0.4 ～＋ 0.7 mで橋縄手地区の「第5a1 層」と近似した値を示している。当遺跡では自然科学分析を実施していないが、標高からすれば島根大学構内遺跡と同時期の古宍道湖の汀線を検出したと言えるのかもしれない。この他、当遺跡と同時期の遺物が出土した遺跡には、西川津遺跡（13）、後谷遺跡（7）、原の前遺跡（14）、タテチョウ遺跡（15）などがあり、復元されている古宍道湖[(2)]の汀線付近に集中している。当時の人々が岸部に面した場所を好んで生活域としていた様子が想定できる。



番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	縄文包含層の標高（m）	時期					備考
						草	前	中	後	晩	
1	D1140	黒田下屋敷遺跡	黒田町	散布地	～　0.9m		○	○			
2	D7	春日遺跡	春日町	散布地							
3	D2	法吉遺跡	法吉町	散布地					○	○	
4	D260	天倫寺前遺跡	堂形町	散布地							
5	D261	宍道湖底遺跡	西浜佐陀町	散布地		○					水中遺跡
6	D1133	廻り遺跡	西長江町	住居跡	28.0m				○		
7	D337	後谷遺跡	東長江町	散布地		○	○				水中遺跡
8	D1128	二部遺跡	古曽志町	散布地	4.9m		○	○	○	○	
9	K3	佐太前遺跡	鹿島町	散布地	4.0m　～　5.0m						
10	K1	佐太講武貝塚	鹿島町	貝塚	－0.05m　～　0.65m		○			○	
11	K95	堀部第１遺跡	鹿島町	散布地	12.0m　～　12.2m				○		
12	D279	島根大学構内遺跡	西川津町	散布地	－1.9m　～　1.3m	○	○	○			
13	D5	西川津遺跡	西川津町	散布地	－2.0m　～　1.0m		○		○	○	
14	D91	原の前遺跡	西川津町	川跡	－1.2m　～　0m		○	○		○	
15	D6	タテチョウ遺跡	西川津町	散布地	－0.5m　～　0m	○	○		○	○	
16	D751	柴尾遺跡	上東川津町	散布地	33.0m　～　33.4m	○					
17	D872	九日田遺跡	大井町	集落跡	7.7m　～　8.4m				○		
18	D448	荒船遺跡	上本庄町	散布地							
19	D438	松崎遺跡	新庄町	散布地							
20	D359	的場遺跡	上本庄町	散布地							
21	D464	柳瀬遺跡	手角町	散布地							
22	D325	夫手遺跡	手角町	ドングリ貯蔵穴・散布地	－0.5m　～　0m				○		
23	D465	権太作遺跡	手角町	散布地							
24	D324	寺ノ脇遺跡	手角町	ドングリ貯蔵穴	1.0m　～　2.4m		○	○	○	○	
25	I108	北浦松ノ木遺跡	美保関町	散布地	2.0m　～　2.1m			○	○		
26	L3	江島遺跡	八束町	散布地							
27	I78	含霊搭下古墳	美保関町			○					
28	I4	サルガ鼻洞窟遺跡	美保関町	散布地・墓			○	○	○	○	
29	I3	権現山洞窟遺跡	美保関町	散布地・墓	5.0m				○	○	
30	I2	小浜洞窟遺跡	美保関町	洞窟・住居跡							
31	I1	玉井遺跡	美保関町	散布地							
32	D336	さっぺい遺跡	八幡町	散布地							
33	D529	竹矢小学校校庭遺跡	八幡町	散布地							
34	D520	法華寺前遺跡	矢田町	散布地							
35	D525	布田遺跡	竹矢町	散布地						○	
36	D524	才塚遺跡	竹矢町	散布地							
37	E27	春日遺跡	東出雲町	散布地						○	
38	E106	鶴賁遺跡	東出雲町	散布地	0m　～　1.3m				○	○	
39	E40	竹ノ花上遺跡	東出雲町	散布地							
40	F97	前田遺跡	八雲町	川跡	26.4m　～　28.0m					○	
41	D1015	勝負遺跡	東津田	集落跡	16.0m　～　17.0m				○		
42	D331	石台遺跡	東津田	散布地	3.0m		○		○	○	
43	D257	福富Ⅰ遺跡	乃木福富町	集落跡	42.0m	○					
44	G116	面白谷遺跡	玉湯町	集落跡					○		
45	H1	弘長寺遺跡	宍道町	散布地							

第 24 図　松江市の縄文遺跡分布図

第２節　第Ⅱ層（中世）

第Ⅱ層は、縄文時代後期～中世の遺物が出土する遺物包含層であり、３層に細分できる。縄文時代の遺物は後期と思われる土器片が２点、弥生時代の遺物は後期の土器片２点が出土しているが、数量としては少ない。古墳時代後期の土器が大部分を占め、とりわけ甑の把手や竈の破片が目立った。恐らく、西側丘陵の東側斜面に集落が存在していたものと思われる[(3)]。ところが、奈良・平安時代の土器は極端に出土量が減少しており、人々の生活は継続しているが、集落の規模が縮小したことが窺える。中世においては 14 ～ 15 世紀頃の土器が出土している。第Ⅱ層の上部から畦畔等の遺構は検出されなかったものの、上層に堆積した第５図６層の擾乱状況（図版４上）から、耕作土として利用されていた可能性が考えられる。この他、特筆すべき遺物に玉作関連の遺物がある。素材としての碧玉や砥石に利用したと考えられる珪化木が出土している。時期の詳細は不明ながら、碧玉の産地である花仙山から宍道湖を隔てた当地で玉作遺跡の存在が明らかになったことは大きな成果の１つである。

第３節　第Ⅰ層（近世～）

第Ⅰ層は、近世以降の水田耕作土と考えられる水平堆積した土層であり、17 世紀初頭の肥前系陶器皿や 17 世紀中頃の肥前系磁器碗が出土している。当遺跡を含む周辺部は字名が「下屋敷」であり、松江藩の家老朝日丹波の下屋敷があったとの伝承が残る[(4)]場所である。西側丘陵の頂部平坦地に建つ民家の周辺には石垣や灯篭、古い土蔵がみられ、ここが屋敷の推定地となっているが、文献や絵図が残されていないので具体的なことはわかっていない。今回の調査では朝日丹波が松江入りする前の肥前系陶磁器も出土していることから、それ以前にも何らかの江戸時代の施設が存在していた可能性も考えられる。

第４節　結語

以上、出土遺物から当遺跡周辺の歴史を概観した。各時代とも遺跡の核心部から離れた場所を調査した結果とはなったが、黒田町で縄文時代前～中期初頭の遺跡の存在が確認されたのは初めてのことである。さらに、本遺跡において土層の状況から当時の古宍道湖の汀線を想定することができた。自然科学分野で縄文海進や海退の旧地形研究が進められている一方、遺物を伴う発掘調査で汀線の位置が示せたことは貴重な成果であった。今後さらに同様の事例が増加し、古環境と遺跡分布の関連性がより具体的に示されることを期待する。

注
（1）島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡第１次調査（橋縄手地区 1）』1997
（2）中村唯史「縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」（島根県古代文化センター『山陰地方の縄文社会』）2014
（3）試掘調査では、後世の削平を受けているため、存在を確認することはできなかった。
（4）松江市法吉公民館『法吉わがとこ聞き歩き』2010

遺 物 観 察 表

【土器】

※層位は第4章第2節を参照

挿図番号	種　類	器　種	グリッド	層　位	法　量(cm)	残存率	胎　　土	焼成	色　　調	調整・手法の特徴等	備　　考
7－1	縄文土器	深鉢	C9	Ⅴ	—	8×6cm	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)黒褐色 (内)黒褐色 (断)黒褐色	(外)爪形文上下に4段・炭化物付着 (内)二枚貝条痕・炭化物付着	
7－2	縄文土器	深鉢	E5	Ⅳ	—	5×5cm	微～2mmの石英粒若干含む	良	(外)暗褐色 (内)暗褐～黒褐色 (断)暗褐～黒褐色	(外)ナデ・貼り付け (内)二枚貝条痕・炭化物付着	
7－3	縄文土器	深鉢	F5	Ⅳ	—	3×2.5cm	2mm前後の石英・長石多く含む	良	(外)褐色 (内)黒褐色 (断)黒褐色	(外)風化 (内)二枚貝条痕・炭化物付着	
7－4	縄文土器	深鉢	D8	Ⅳ	—	4×3.5cm	微～1mmの石英・長石多く含む	良	(外)暗灰色 (内)黒灰色 (断)黒灰色	(外)二枚貝条痕 (内)二枚貝条痕・炭化物付着	
7－5	縄文土器	深鉢	D4	Ⅳ	—	6×6cm	1mm前後の石英・長石若干含む	良	(外)暗褐色 (内)黒褐色 (断)黒褐色	(外)無文 (内)二枚貝条痕・炭化物付着	
7－6	縄文土器	深鉢	E5	Ⅳ	—	11×6cm	微～2mm前後の石英多く含む	良	(外)褐色 (内)暗褐～黒褐色 (断)暗褐～黒褐色	(外)風化 (内)二枚貝条痕・炭化物付着著しい	
7－7	縄文土器	深鉢	D4	Ⅳ	—	5×4cm	1mm前後の石英若干含む	良	(外)褐色 (内)暗褐色 (断)暗褐色	(外)無文 (内)二枚貝条痕・炭化物付着	
7－8	縄文土器	深鉢	D8	Ⅳ	—	7×5cm	微～1mmの石英・長石多く含む	良	(外)黒褐色 (内)黒褐色 (断)黒褐色	(外)縄文（無節） (内)炭化物付着	
7－9	縄文土器	深鉢	F5	Ⅳ	—	4×3cm	微～1mm前後の石英・長石若干含む	良	(外)暗褐色 (内)淡褐色 (断)灰色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)風化	
7－10	縄文土器	深鉢	E6	Ⅳ	—	14×20cm	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)暗褐色 (内)褐～暗褐色 (断)褐～暗褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)巻貝条痕	
7－11	縄文土器	浅鉢	F5	Ⅳ	—	8.5×5.5cm	微～2mmの石英・長石多く含む	良	(外)暗褐色 (内)褐色 (断)褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)風化	
7－12	縄文土器	深鉢	F5	Ⅳ	—	5×4.5cm	1mm前後の石英・長石若干含む	良	(外)暗褐色 (内)褐色 (断)暗～褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)巻貝条痕	
7－13	縄文土器	深鉢	F5	Ⅳ	—	10×12cm	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)濃褐色 (内)褐色 (断)褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)巻貝条痕	
8－1	縄文土器	深鉢	E5	Ⅳ	—	7×11cm	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)暗褐色 (内)褐色 (断)褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)巻貝条痕・炭化物少量付着	
8－2	縄文土器	深鉢	F5	Ⅳ	—	7×9cm	微～1mmの石英・長石多く含む	良	(外)暗褐色 (内)褐～淡褐色 (断)褐～淡褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)巻貝条痕	土器片錘の可能性有り
8－3	縄文土器	深鉢	E5	Ⅳ	—	14×12cm	1mm前後の石英・長石多く含む	良	(外)黒褐色 (内)黒褐色 (断)黒褐色	(外)縄文（RL）・炭化物付着 (内)巻貝条痕・炭化物付着	
8－4	縄文土器	深鉢	E5	Ⅳ	—	7×7cm	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)暗褐色 (内)褐色 (断)褐色	(外)縄文（無節）・炭化物付着 (内)巻貝条痕・炭化物付着	土器片錘の可能性有り
8－5	縄文土器	深鉢	E6	Ⅳ	底径(8.7)	10×6cm	1mm前後の石英・長石多く含む	良	(外)灰黄～黒褐色 (内)灰黄色 (断)灰黄色	(外)縄文（RL）・表面剥離不明 (内)巻貝痕跡かナデか	
9－1	縄文土器	浅鉢	D5	Ⅱ②	—	9×6cm	微～4mmの石英・長石多く含む	良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)褐色	(外・内)風化	
9－2	弥生土器	甕	D5	Ⅱ②	口径(25.4)	口縁部 15%	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)浅黄色～淡黄色 (内)黒褐色 (断)浅黄色	(外)横ナデ (内)ケズリ	
9－3	弥生土器	甕	E8	Ⅱ③	底径(10.4)	底部 25%	微～1mmの石英・長石多く含む	良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)黒褐色	(外・内)風化	
9－4	土師器	高坏	C9	Ⅱ③	—	底部 10%	微砂粒を含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外・内)風化	
9－5	土師器	高坏	E5	Ⅱ②	—	脚部 30%	1mm前後の長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外) 風化 (内)ケズリ	
9－6	土師器	高坏	E5	Ⅱ③	底径(10.2) 孔径0.8	脚部 20%	1mm前後の長石含む	良	(外)白灰色 (内)白灰色 (断)白灰色	(外・内)風化	
9－7	土師器	低脚坏	D6	Ⅱ③	底径(8.4) 脚部高(3.1)	脚部 10%	微～1mmの石英・長石若干含む	良	(外)褐色 (内)褐色 (断)褐色	(外)ハケメ (内)横ナデ	
9－8	土師器	甕	C8	Ⅱ①	口径(13.8)	口縁部 25%	微～1mmの石英・長石多く含む	良	(外)淡褐色 (内)白灰色 (断)白灰色	(外)横ナデ (内)横ナデ・胴部はケズリ	甑の可能性もあり
9－9	土師器	甕	D7	Ⅱ③	口径(16.8)	口縁部 20%	微細な石英・長石を含む	良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)淡褐色	(外・内)風化	甑の可能性もあり
9－10	土師器	甕	E7	Ⅱ②	口径(19.6)	口縁部 20%	1mm前後の石英・長石若干含む	やや 不良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)淡褐色	(外・内)風化	甑の可能性もあり
9－11	土師器	甕	E6	Ⅱ②	—	口縁部 10%	微～3mmの石英・長石多く含む	良	(外)淡～褐色 (内)淡～褐色 (断)淡～褐色	(外)横ナデ (内)横ナデ・胴部はケズリ	甑の可能性もあり
9－12	土師器	甕	C9	Ⅱ③	—	口縁部 10%	微細な石英・長石若干含む	良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)淡褐色	(外・内)風化	甑の可能性もあり
9－13	土師器	甕	E6	Ⅱ②	—	口縁部 10%	1mm前後の石英・長石含む	良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色 (断)浅黄橙色	(外・内)風化	甑の可能性もあり
10－1	土師器	(把手)	D8	Ⅱ①	—	—	1mm以下の石英・長石含む	良	(外)白褐色 (内)白褐色 (断)白褐色	風化	甑か

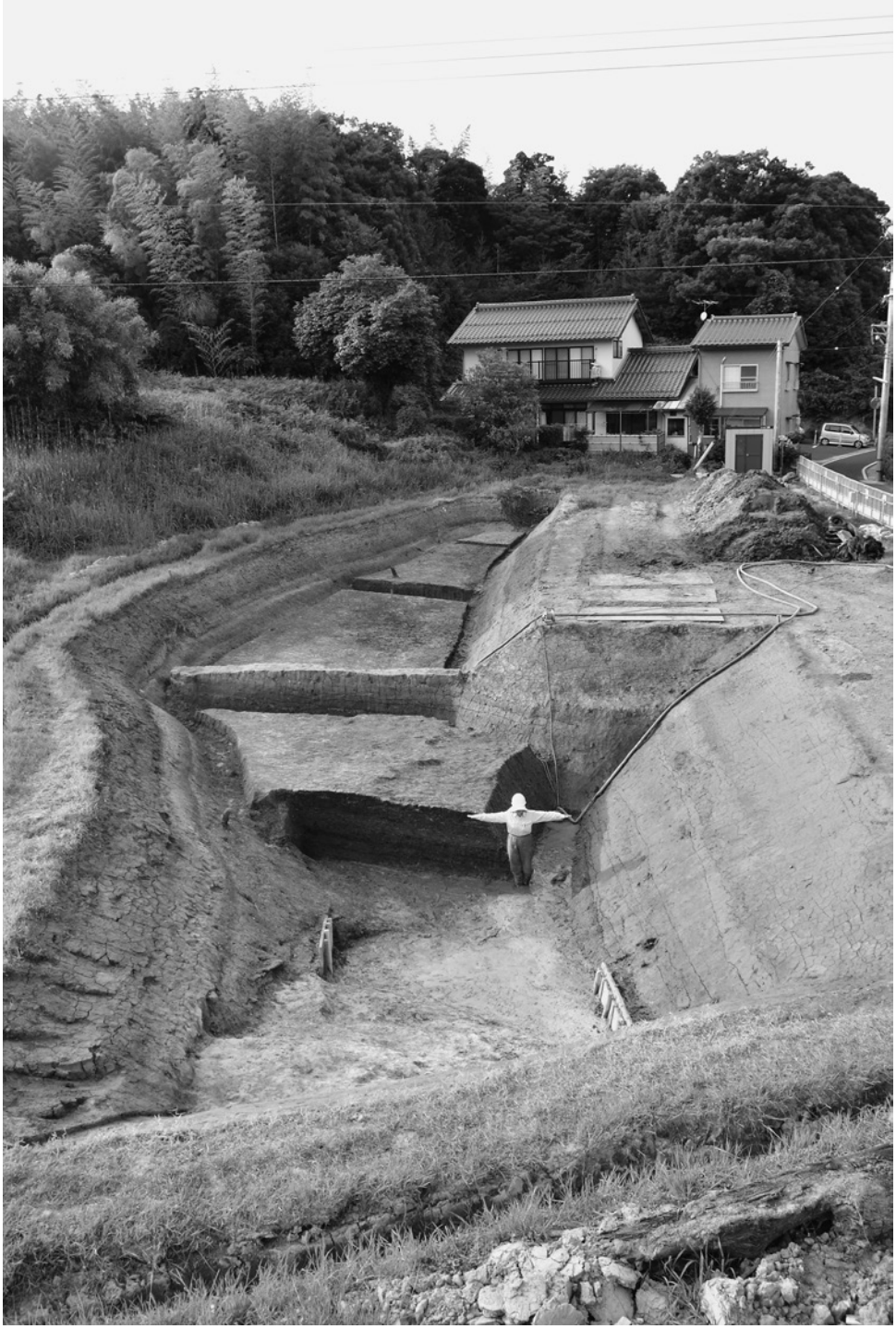
挿図番号	種　類	器　種	グリッド	層　位	法　量(cm)	残存率	胎　　土	焼成	色　　調	調整・手法の特徴等	備　　考
10－2	土師器	(把手)	D8	Ⅱ①	—	—	1mm前後の石英・長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	風化	甑か
10－3	土師器	(把手)	C9	Ⅱ③	—	—	1mm以下の石英・長石含む	良	(外)黄褐色 (内)黄褐色 (断)黄褐色	ハケメ	甑か
10－4	土師器	(把手)	D7	Ⅱ③	—	—	1mm以下の砂粒含む	良	(外)白褐色 (内)白褐色 (断)白褐色	風化	甑か
10－5	土師器	(把手)	D9	Ⅱ③	—	—	1～2mmの石英･長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	風化	甑か
10－6	土師器	(把手)	D7	Ⅱ③	—	—	1mm前後の石英・長石含む	良	(外)白褐色 (内)白褐色 (断)白褐色	ハケメ（風化が著しい）	甑か
10－7	土師器	(把手)	D4	Ⅱ②	—	—	1～2mmの石英･長石含む	良	(外)黄褐色 (内)黄褐色 (断)黄褐色	風化	甑か
10－8	土師器	(把手)	D7	Ⅱ③	—	—	1mm以下の砂粒含む	良	(外)白褐色 (内)白褐色 (断)白褐色	風化	甑か
11－1	土製品	移動式竈	E7	Ⅱ③	—	—	1mm前後の石英・長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・ヘラケズリ	焚口庇 被熱
11－2	土製品	移動式竈	E7	Ⅱ③	—	—	1mm前後の石英・長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外・内) 風化	焚口庇
11－3	土製品	移動式竈	D8	Ⅱ①	—	—	微細な石英・長石多く含む	やや良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)淡褐色	(外・内)風化	焚口庇 被熱
11－4	土製品	移動式竈	D8	Ⅱ③	—	—	微～1mmの石英・長石多く含む	やや良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)淡褐色	(外・内)風化	焚口庇
11－5	土製品	移動式竈	E7	Ⅱ③	—	—	石英・長石・微砂粒含む	良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色 (断)浅黄橙色	(外)横ナデ (内)指頭圧痕	焚口庇 被熱
11－6	土製品	移動式竈	D7	Ⅱ③	—	—	微～2mmの石英・長石含む	良	(外)淡褐色 (内)褐～淡褐色 (断)淡褐～灰色	(外・内)風化	焚口庇 被熱
11－7	土製品	移動式竈	D8	Ⅱ②	—	—	1mmの石英・長石含む	良	(外)にぶい黄褐色 (内)灰黄褐～にぶい黄橙色 (断)にぶい黄橙色	(外)ハケメ (内)ナデ	焚口庇 被熱
11－8	土製品	移動式竈	D7	Ⅱ③	—	—	1mm前後の石英・長石含む	良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色 (断)浅黄橙色	(外)ケズリ・指頭圧痕 (内)ナデ・ヘラケズリ	焚口庇 被熱
11－9	土製品	移動式竈	C8	Ⅱ③	—	—	1mm以下の石英・長石含む	良	(外)白褐色 (内)白褐色 (断)白褐色	(外・内)風化	焚口庇側面の突起部
11－10	土製品	移動式竈	D7	Ⅱ③	—	—	1mmの石英・長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外)ナデ (内)ナデ	焚口庇側面の突起部 被熱
11－11	土製品	移動式竈	D7	Ⅱ③	—	—	微細な石英・長石含む	良	(外)黄褐色 (内)黒褐～灰黄色 (断)黄褐色	(外・内)風化	焚口庇側面の突起部 被熱
11－12	土製品	移動式竈	E7	Ⅱ③	—	—	1mm以下の石英・長石含む	良	(外)黒色 (内)黄褐色 (断)黄褐色	(外)ハケ (内)横ナデ	底部 被熱
11－13	土製品	移動式竈	C9	Ⅱ③	—	—	1～2mmの石英･長石含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外)指頭圧痕 (内)ナデ	底部 被熱
11－14	土製品	移動式竈	D7	Ⅱ③	—	—	1mm以下の石英・長石含む	良	(外)黒色 (内)黄褐色 (断)黄褐色	(外)ハケメ (内)横ナデ	底部 被熱
11－15	土製品	土玉	D8	Ⅱ③	最大φ3.1 最大厚2.7 孔径1.2	100%	1～2mmの石英･長石含む	良	黄橙～淡黄色	(外・内)風化	
12－1	須恵器	坏蓋	C8	Ⅱ②	口径(13.8) 器高3.9	40%	微砂粒若干含む	良	(外)黒褐灰～灰色 (内)灰色～淡灰色 (断)にぶい赤褐色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ・回転ナデ後不定方向のナデ	ろくろ:右回転
12－2	須恵器	坏蓋	E7	Ⅱ②	口径(12.7)	20%	微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－3	須恵器	坏蓋	D6	Ⅱ③	口径(12.0)	口縁部 10%	石英・長石微粒若干含む	やや不良	(外)灰色 (内)淡灰～淡橙色 (断)淡橙色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－4	須恵器	坏蓋	D6	Ⅱ③	口径(14.0)	50%	微砂粒若干含む	やや不良	(外)淡灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－5	須恵器	坏蓋	D8	Ⅱ③	口径(11.2)	口縁部 15%	微粒を若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ後ナデ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－6	須恵器	坏蓋	E7	Ⅱ②	口径(11.8) 器高3.8	70%	微砂粒を若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラ切り後回転ナデ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－7	須恵器	坏	D3	Ⅱ②	口径(11.6) 受部径 (13.6)	25%	石英・長石・微砂粒若干含む	良	(外)淡灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－8	須恵器	坏	C8	Ⅱ③	口径(12.5) 受部径 (14.7)	口縁部 15%	微細な石英・長石多く含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
12－9	須恵器	坏	C7	Ⅱ③	口径(10.9) 受部径 (14.2)	口縁部 25%	微細な石英・長石若干含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
12－10	須恵器	坏	C9	Ⅱ③	口径(11.3) 受部径 (13.5)	口縁部 15%	微細な石英・長石若干含む	良	(外)灰～灰褐色 (内)灰褐色 (断)灰褐色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
12－11	須恵器	坏	D7	Ⅱ③	口径(11.4) 受部径 (14.4)	口縁部 10%	微～1mmの石英・長石多く含む	良	(外)白灰～灰色 (内)白灰色 (断)白灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	

挿図番号	種　類	器　種	グリッド	層　位	法　量(cm)	残存率	胎　　土	焼成	色　　調	調整・手法の特徴等	備　　考
12－12	須恵器	坏	D6	Ⅱ③	口径(12.6) 受部径 (14.8)	口縁部 10%	微細な石英・長石多く含む	良	(外)暗灰～灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
12－13	須恵器	坏	E7	Ⅱ②	口径(10.9) 受部径 (12.8) 器高4.3	25%	石英・長石・微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	ろくろ:右回転
12－14	須恵器	坏	E7	Ⅱ②	口径(10.6) 受部径 (12.0)	口縁部 20%	微細な石英・長石含む	やや良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ・回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	
12－15	須恵器	坏	C8	Ⅱ①	口径(8.5) 受部径 (11.4)	口縁部 15%	微細な石英・長石若干含む	良	(外)暗灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
12－16	須恵器	坏	C9	Ⅱ③	口径(13.2)	口縁部 10%	微細な石英・長石若干含む	良	(外)暗灰～灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	火ぶくれ有り
12－17	須恵器	坏	D8	Ⅱ③	口径(10.0)	口縁部 10%	微細な石英・長石含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
12－18	須恵器	坏	D8	Ⅱ③	口径(10.8)	口縁部 20%	微～1㎜の石英・長石若干含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
13－1	須恵器	高坏	E7	Ⅱ②	底径(8.0)	脚部 35%	微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	方形透かし3方向
13－2	須恵器	高坏	E7	Ⅱ②	底径(9.4)	脚部 10%	微砂粒若干含む	良	(外)淡灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	二段方形透かし2方向
13－3	須恵器	高坏	E7	Ⅱ③	—	坏部 20%	微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)不定方向のナデ	線状透かし2方向
13－4	須恵器	高坏	D9	Ⅱ③	—	坏部 25%	微～3㎜の石英・長石含む	良	(外)暗灰色 (内)暗灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	線状か方形透かしか2方向
13－5	須恵器	蓋	D4	Ⅱ②	口径(14.8)	口縁部 15%	微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
13－6	須恵器	蓋	C7	Ⅱ③	—	20%	微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
13－7	須恵器	(把手)	C8	Ⅱ②	Φ1.3 長さ8.1	20%	1㎜前後の長石含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)ナデ･ケズリ (内)ナデ	牛角状
13－8	須恵器	(把手)	F6	Ⅱ②	—	20%	1㎜前後の石英・長石含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)ナデ･ケズリ (内)回転ナデ後ナデ	
14－1	土師器	高台付坏	E8	Ⅱ①	底径(6.6)	底部 80%	微細な石英・長石多く含む	やや良	(外)淡褐色 (内)淡褐色 (断)淡褐色	(外・内)風化	
14－2	土師器	高台付坏	E8	Ⅱ③	底径(8.9)	40%	微砂粒含む	良	(外)淡黄色 (内)淡黄色 (断)淡黄色	(外・内)風化	
14－3	須恵器	蓋	E7	Ⅱ③	—	10%	微粒を若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
14－4	須恵器	(つまみ)	C8	Ⅱ①	つまみ径 (3.3)	つまみ 90%	微砂粒若干含む	良	(外)淡灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)ナデ	
14－5	須恵器	坏	D5	Ⅱ②	底径(6.6)	底部 50%	微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)	(外)回転ナデ・糸切り (内)回転ナデ	
14－6	須恵器	皿	C8	Ⅱ③	底径(10.1)	底部 20%	微砂粒若干含む	やや不良	(外)灰色～淡灰色 (内)淡灰色 (断)	(外)回転ナデ後不定方向のナデ (内)回転ナデ・糸切り	
14－7	須恵器	甕	E7	Ⅱ③	口径(23.7)	口縁部 15%	微砂粒若干含む	良	(外)灰～淡灰色 (内)灰～淡灰色 (断)淡灰色	(外)回転ナデ・平行文タタキ (内)回転ナデ	
15－1	陶器	甕	D6	Ⅱ③	口径(31.4)	口縁部 20%	微砂粒若干含む	良	(外)灰～淡灰色 (内)淡灰色 (断)	(外)平行タタキ (内)回転ナデ	
15－2	須恵器	甕	E6	Ⅱ③	—	5%	石英・長石・微砂粒若干含む	良	(外)灰色 (内)淡灰色 (断)淡灰色	(外)不定方向のナデ・格子タタキ (内)ナデ	
15－3	須恵器	甕	D9	Ⅱ③	底径(16.4)	底部 15%	微～1㎜の石英・長石多く含む	良	(外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
15－4	須恵器	鉢	C8	Ⅱ③	—	口縁部 5%	微細な砂粒若干含む	やや良	(外)灰色 (内)灰色 (断)淡灰色	(外)格子タタキ (内)回転ナデ	
15－5	須恵器	鉢	D6	Ⅱ①	—	口縁部 5%	微～1㎜の石英・長石若干含む	良	(外)淡灰色 (内)灰黄褐色 (断)淡灰色	(外)風化 (内)回転ナデ	
15－6	陶器	甕	D2	Ⅱ①	—	口縁部 5%	微砂粒若干含む	良	(外)赤褐色 (内)赤褐色 (断)灰黄褐色	貼り付け	備前
15－7	土師器	皿	D4	Ⅱ①	底径(4.0)	底部 50%	微砂粒若干含む	良	(外)淡橙色 (内)明赤褐色 (断)明赤褐色	(外)回転糸切り (内)ナデ	
23-1	陶器	甕	C3	Ⅰ	—	5%	微～1㎜の石英・長石若干含む	良	(外)紫灰色 (内)青灰色 (断)青灰色	(外)タタキ (内)ナデ	常滑
23-2	磁器	碗	C3	Ⅰ	口径(9.2)	口縁部 10%	—	良	—	(外)染付	肥前(1650～1680年代)
23-3	陶器	皿	E6	Ⅰ	底径(4.4)	底部 25%	—	良	—	(外)高台周囲は露胎 (内)透明釉・砂目	肥前(1610～1650年代)

【石器】 ※層位は第3章第2節

挿図番号	種　類	グリッド	層 位	法　量(cm・g)	石　材	色　調	備　考
8－6	錘	D8	Ⅳ	縦8.9・横7.9・厚1.3・重130.0	―	灰色	上下左右4ヶ所に打ち欠きあり
16－1	鏃	D5	Ⅱ③	縦2.2・横1.8・厚0.5・重1.4	黒曜石	黒色	先端をわずかに欠損
16－2	剥片	E7	Ⅱ②	縦2.4・横1.8・厚0.55・重3.0	黒曜石	黒色	
16－3	小石核	E4	Ⅱ②	縦3.3・横3.7・厚1.5・重24.7	黒曜石	黒色	
16－4	スクレイパー	D2	Ⅱ②	縦3.8・横4.4・厚1.0・重18.3	黒曜石	黒色	第5図－1に出土ポイント有り
16－5	小石核	D2	Ⅱ②	縦3.8・横8.1・厚2.8・重82.7	黒曜石	黒色	残核
16－6	剥片	C3	Ⅱ①	縦2.7・横2.1・厚0.8・重5.8	黒曜石	黒色	
16－7	剥片	D2	Ⅱ①	縦3.7・横1.9・厚0.65・重4.1	黒曜石	黒色	
16－8	剥片	D1	Ⅱ②	縦2.7・横2.7・厚1.1・重7.8	黒曜石	黒色	
16－9	剥片	E3	Ⅱ①	縦1.4・横3.5・厚0.9・重3.6	黒曜石	黒色	
16－10	剥片	D2	Ⅱ②	縦2.2・横3.0・厚1.0・重6.2	黒曜石	黒色	
16－11	剥片	D2	Ⅱ①	縦1.6・横3.0・厚0.6・重2.5	黒曜石	黒色	
16－12	剥片	D2	Ⅱ②	縦2.1・横2.4・厚0.6・重2.3	黒曜石	黒色	
16－13	剥片	E5	Ⅱ①	縦2.7・横2.9・厚1.3・重9.0	黒曜石	黒色	
16－14	剥片	D4	Ⅱ②	縦2.1・横2.9・厚1.0・重6.0	黒曜石	黒色	
16－15	剥片	D3	Ⅱ②	縦2.5・横1.0・厚0.5・重1.2	黒曜石	黒色	
16－16	剥片	D3	Ⅱ③	縦4.8・横2.2・厚1.0・重10.7	黒曜石	黒色	
16－17	剥片	D2	Ⅱ②	縦2.6・横4.6・厚1.9・重24.8	黒曜石	黒色	
16－18	剥片	D1	Ⅱ②	縦3.2・横5.7・厚1.8・重28.1	黒曜石	黒色	
17－1	剥片	E3	Ⅱ②	縦7.3・横8.1・厚1.9・重90.4	黒曜石	黒色	
17－2	剥片	C5	Ⅱ②	縦5.2・横5.0・厚0.9・重18.1	黒曜石	黒色	
17－3	剥片	D1	Ⅱ②	縦3.3・横2.8・厚1.3・重15.5	玉髄	暗赤褐色	
17－4	剥片	D1	Ⅱ②	縦3.7・横5.9・厚1.6・重34.5	玉髄	褐色と濃灰色の縞	
17－5	剥片	D1	Ⅱ②	縦2.8・横3.8・厚1.8・重27.0	玉髄	明～暗赤褐色	
17－6	剥片	D7	Ⅱ①	縦4.1・横4.5・厚1.9・重36.0	玉髄	赤色と茶色の縞	
17－7	スクレイパー	F6	Ⅱ②	縦3.2・横3.8・厚1.1・重23.2	サヌカイト	濃灰色	両端を欠損している可能性有り
17－8	剥片	D1	Ⅱ②	縦3.2・横5.6・厚1.5・重35.0	サヌカイト	灰色	新しい剥離あり
17－9	剥片	D1	Ⅱ②	縦4.0・横3.9・厚2.7・重65.5	サヌカイト	灰色と濃灰色の縞	
18－1	擦り石	D8	Ⅱ③	縦13.0・横6.4・厚5.5・重425.0	―	灰色	敲打痕有り、表面剥離が著しい
18－2	石皿	E4	Ⅱ③	縦13.2・横(8.7)・厚2.9・重572.0	―	灰白色	敲打痕・擦痕有り、約半分欠損か
19－1	錘	D2	Ⅱ③	縦6.7・横6.6・厚1.7・重116.7	―	淡黄～灰白色	川原石を利用
19－2	錘	D7	Ⅱ②	縦7.7・横3.7・厚1.2・重48.4	―	灰色	川原石を利用
19－3	錘	F3	Ⅱ②	縦8.0・横5.8・厚1.8・重101.8	―	灰色	川原石を利用
19－4	錘	E4	Ⅱ②	縦8.1・横4.0・厚1.7・重78.9	―	淡黄色	川原石を利用、擦痕有り
19－5	錘	D5	Ⅱ②	縦7.3・横5.0・厚1.7・重89.0	―	灰白色	川原石を利用
20－1	錘	D3	Ⅱ③	縦8.9・横7.9・厚1.3・重129.5	大海崎石	淡褐色	川原石を利用
20－2	錘	F5	Ⅱ②	縦(7.4)・横10.1・厚2.0・重218.5	―	灰色	風化による剥離、約1/2欠損、川原石を利用
21－1	剥片	E6	Ⅱ②	縦1.8・横1.2・厚0.8・重1.0	碧玉	濃緑色	
21－2	剥片	E6	Ⅱ②	縦1.5・横3.0・厚1.0・重5.2	碧玉	濃緑色	
21－3	剥片	C8	Ⅱ③	縦2.4・横2.2・厚1.3・重7.6	碧玉	濃緑色	
21－4	剥片	E6	Ⅱ②	縦4.0・横2.3・厚1.5・重13.4	碧玉	濃緑色	
21－5	剥片	D7	Ⅱ③	縦3.0・横4.0・厚1.7・重18.9	碧玉	淡～濃緑色	
21－6	剥片	C8	Ⅱ③	縦3.2・横3.8・厚2.0・重19.2	碧玉	深緑色	
21－7	剥片	E5	Ⅱ①	縦5.0・横6.1・厚3.0・重69.9	碧玉	縞状の緑色	
21－8	剥片	C9	Ⅱ③	縦5.4・横4.9・厚2.5・重47.8	碧玉	濃緑色	
21－9	剥片	C8	Ⅱ③	縦7.9・横4.8・厚3.5・重109.2	碧玉	濃緑色	
22－1	砥石	D8	Ⅱ①	縦8.0・横5.1・厚5.0・重248.1	珪化木	淡褐色～灰白色	砥面2ヶ所、その他にも軽い使用痕有り
22－2	砥石	D3	Ⅱ②	縦3.3・横3.6・厚1.8・重32.4	珪化木	乳白色	使用痕無し、両端欠損
22－3	砥石	C8	Ⅱ③	縦8.6・横4.7・厚5.1・重261.9	―	淡灰色	砥面3ヶ所、砥面に敲打痕有り

写真図版



調査前風景（北から）

完堀状況（南から）

南端の地山検出状況（北から）

調査区南壁セクション A-A’（北から）

調査区東壁セクション B-B’（南西から）

調査区東壁セクション B’-A（南西から）

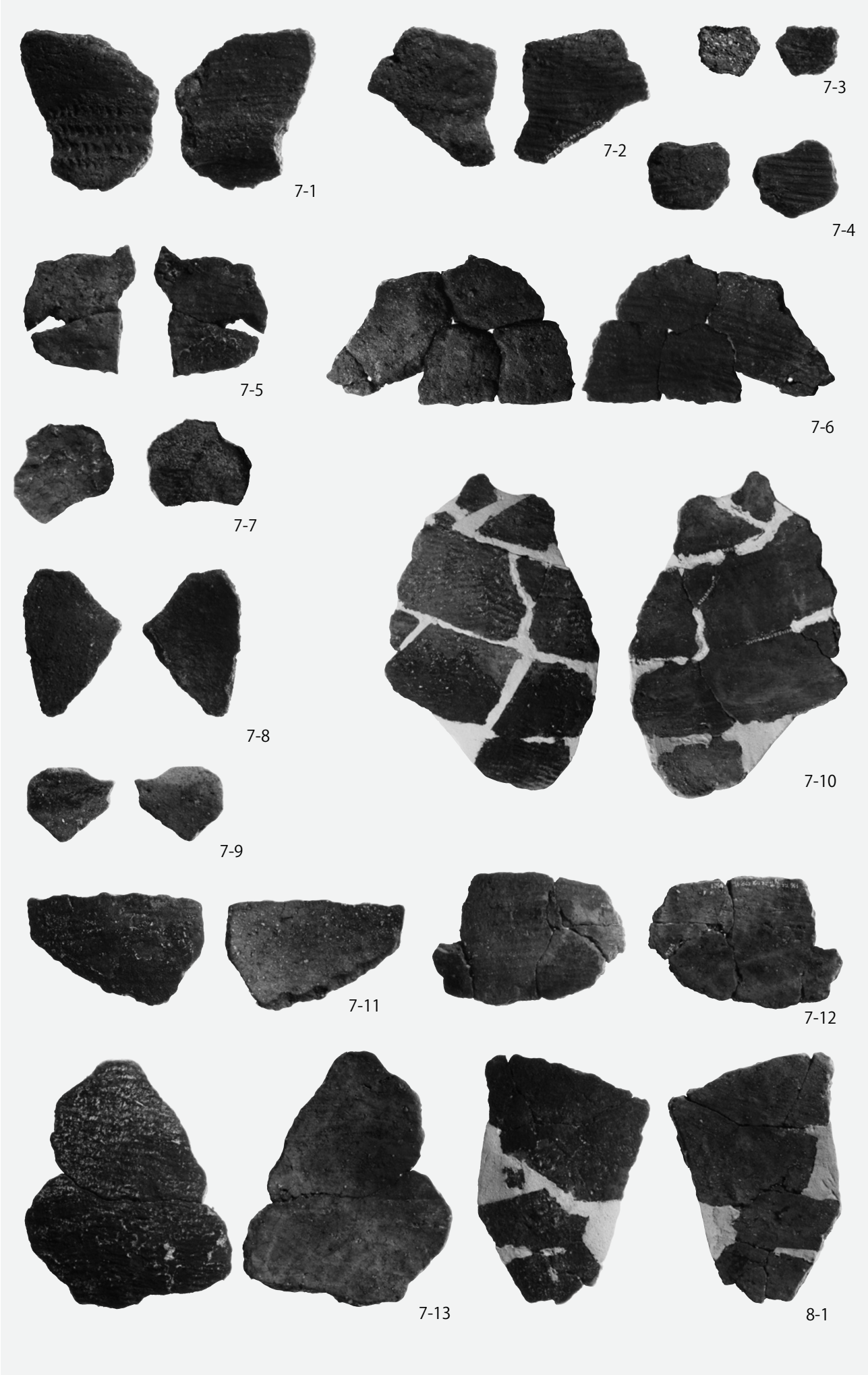
第Ⅱ層①黒色粘質土の擾乱状況

第Ⅱ層の遺物出土状況

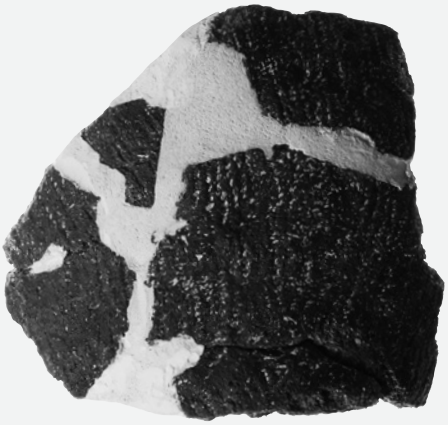
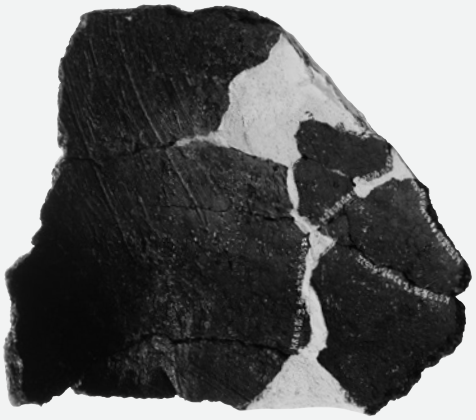
第Ⅳ層の縄文土器出土状況

第Ⅴ層の縄文土器出土状況

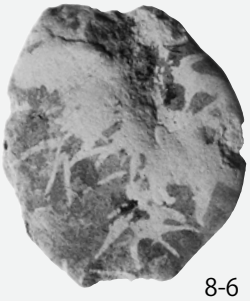
図版 6

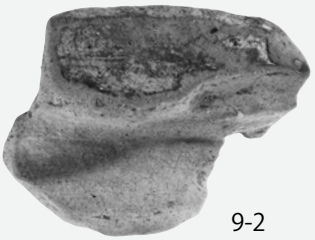


8-2

8-4


8-3

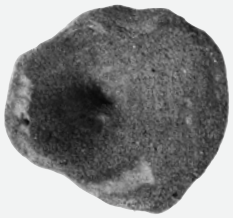
8-5


8-6

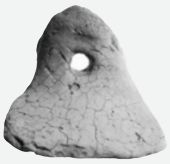
9-1

9-2

9-3

9-5

9-4

9-7

9-8

9-9

9-6

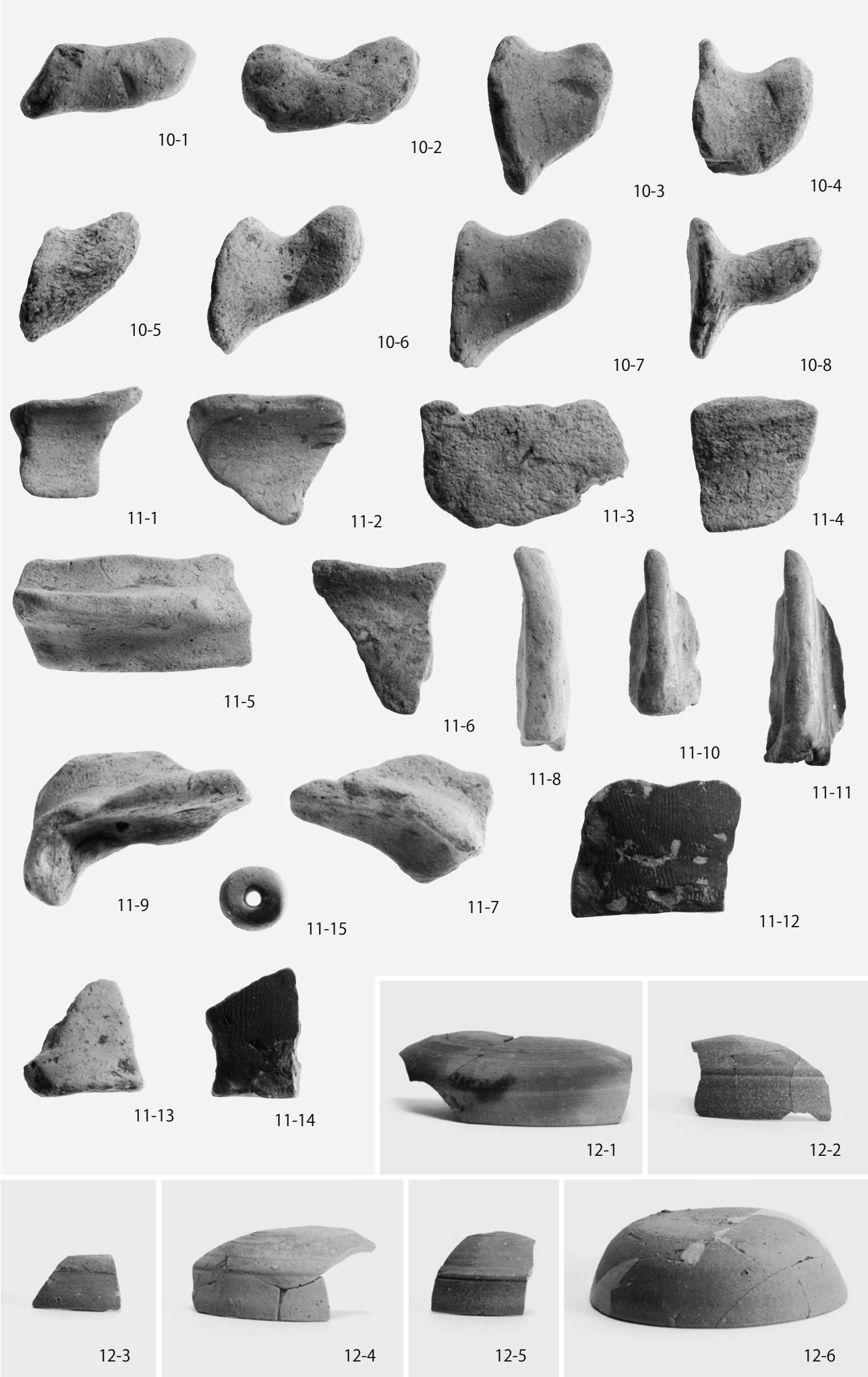
9-10

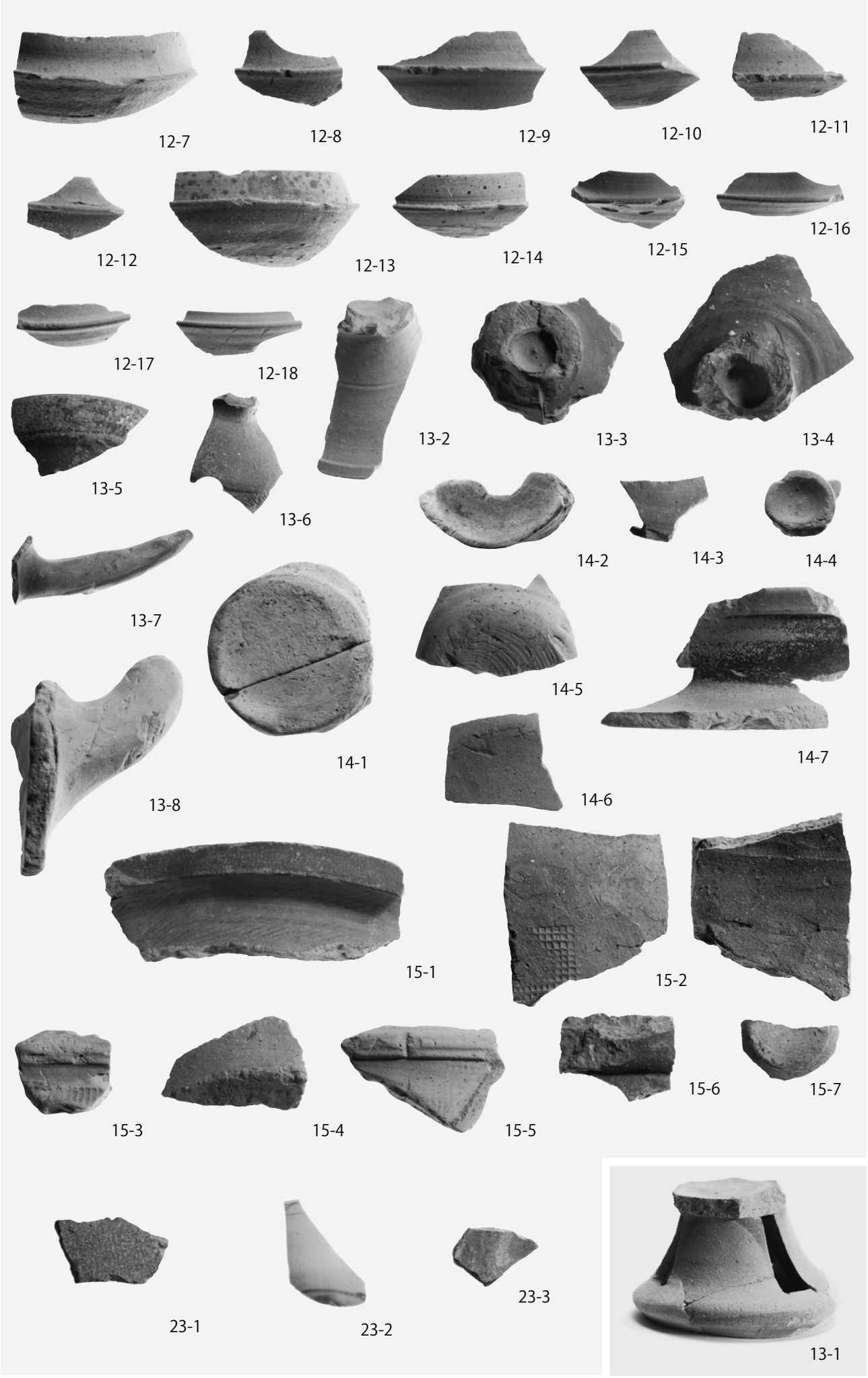
9-11

9-12

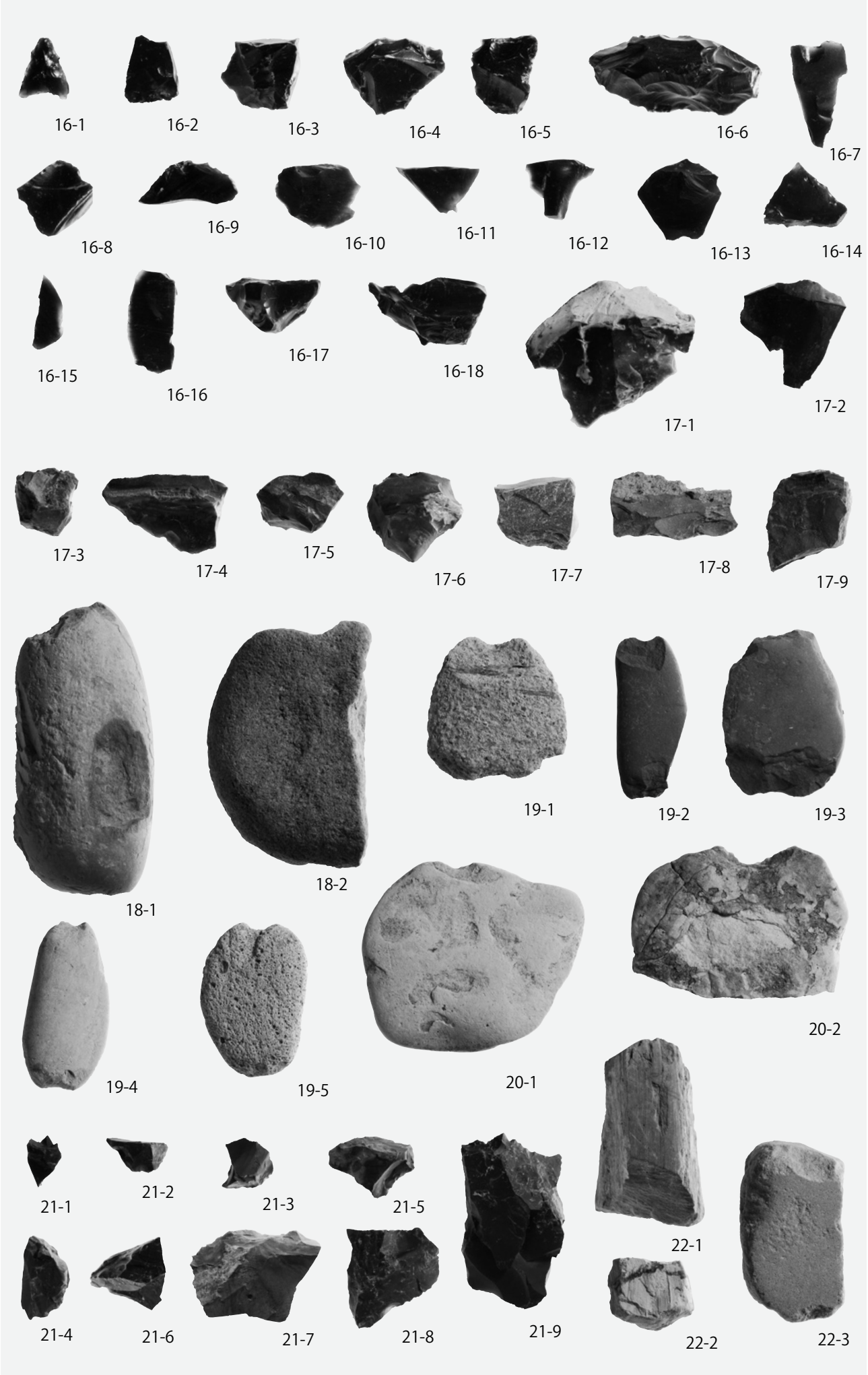
9-13

図版 8


10-1
10-2
10-3
10-4
10-5
10-6
10-7
10-8
11-1
11-2
11-3
11-4
11-5
11-6
11-8
11-10
11-11
11-9
11-15
11-7
11-12
11-13
11-14
12-1
12-2
12-3
12-4
12-5
12-6


12-7
12-8
12-9
12-10
12-11
12-12
12-13
12-14
12-15
12-16
12-17
12-18
13-2
13-3
13-4
13-5
13-6
14-2
14-3
14-4
13-7
14-5
14-1
14-7
13-8
14-6
15-1
15-2
15-3
15-4
15-5
15-6
15-7
23-1
23-2
23-3
13-1

図版 10


16-1
16-2
16-3
16-4
16-5
16-6
16-7
16-8
16-9
16-10
16-11
16-12
16-13
16-14
16-15
16-16
16-17
16-18
17-1
17-2
17-3
17-4
17-5
17-6
17-7
17-8
17-9
18-1
18-2
19-1
19-2
19-3
19-4
19-5
20-1
20-2
21-1
21-2
21-3
21-5
21-4
21-6
21-7
21-8
21-9
22-1
22-2
22-3

報　告　書　抄　録

ふりがな	くろだしもやしきいせき
書名	黒田下屋敷遺跡
副書名	黒田住宅団地造成事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 169　集
編著者名	江川幸子
編集機関及び所在地	松江市教育委員会（歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室） 〒690-8540　島根県松江市末次町86番地　℡0852-55-5284 公益財団法人松江市スポーツ振興財団　埋蔵文化財課 〒690-0401　島根県松江市島根町加賀1263-1　℡0852-85-9210
発行年月日	平成27年10月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
くろだしもやしきいせき 黒田下屋敷遺跡	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 くろだちょう 黒田町 ばんほか 554番1外	32201	D1140	35°48′38″ 133°04′13″	平成27年4月17日～平成27年7月6日	384 ㎡	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
くろだしもやしきいせき 黒田下屋敷遺跡	散布地	縄文時代～近世		石器 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	縄文時代前・中期の汀線確認

松江市文化財調査報告書　第169集

黒田住宅団地造成事業に伴う発掘調査報告書

黒田下屋敷遺跡

平成27(2015)年11月

編集・発行　島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印　　刷　有限会社　黒潮社
島根県松江市向島町182-3